

〔論文〕

犯罪・ミステリー映画の日中比較（6）

近 藤 泉

名古屋学院大学国際文化学部

要 旨

犯罪映画・ミステリー映画に関し、日本と中国の作品を比較する。このテーマでは、日中双方において先行研究が存在しない。調査するのは2010年～2018年の9年間とし、両国とも各年度の興行収入ランキング上位の計約40本の作品を調査対象とし、日中計80本程の全作品について、58の項目について一つ一つチェックし表を作成した。日中の表を比較し、極力客観的に日中を比較する。ページ数の都合で、論文は数回に分け発表、1回目は中国の作品、2回目～3回目前半は日本の作品に関する部分を掲載、3回目以降、作成した表等を使いつつ日中を比較している。今回が6回目で、最近の状況をも知るため、補足的に22年以降の中国の作品をも取り上げる。補足的に取り上げた2018年以前及び2019年以降の作品を含めると、今回までに取り上げた中国の作品は計100作を超える。これにより、日中の映画の比較ができるだけでなく、両国の社会や人々の意識の違いをも見て取れよう。

キーワード：日中比較、犯罪映画、ミステリー、映画

A comparison of Japanese and Chinese crime and mystery films(6)

Izumi KONDO

Faculty of Intercultural Studies
Nagoya Gakuin University

発行日 2025年3月31日

1. はじめに

1.1

本論文は、日本と中国の犯罪・ミステリー関連映画を比較するものであり、2010年～2018年の9年間に公開された映画を中心に比較する。

できる限り客観性に比較するため、中国の作品としては、中国の2010～2018年における毎年度の興行成績ランキング（大陸以外・外国の作品をも含むランキング）上位100位までに入った犯罪関連映画37本、日本の作品としては、日本の2010～2018年における毎年度の興行成績ランキング（外国の作品をも含むランキング）上位30位までに入った犯罪関連映画43本を取り上げ、両国合わせて計80本ほどの映画により日中の比較を行う。

また、本論文で扱う中国映画は、大陸の映画に限定する。香港映画にも警官・警察や犯罪組織などが登場する映画は多いが、そうした大陸以外の映画は含まない。なお、大陸と香港の合作（1997年に香港が中国に返還されてから、香港映画は大陸資本に依存するようになり、また香港映画界の人材が大陸に活躍の場を求め、そもそも大陸と香港の境が不分明になっているが。）、中国と外国の合作などの場合は、とりあえず監督が中国（大陸）の監督である場合のみ、中国（大陸）の作品として本論文で取り上げた。

そして、本論文「犯罪・ミステリー映画の日中比較（1）」「犯罪・ミステリー映画の日中比較（2）」において明示し忘れ、大変申し訳ないが、本論文では、中国映画は基本的には中華人民共和国成立後を舞台とする作品、日本映画は戦後を舞台とする作品のみについて扱った。したがって、前近代を舞台とする時代物・歴史物、民国時代を背景とするものなどは、除外されている。

なお、本論文は日中の映画の比較をし、その違いを明らかにするものであるが、映画・ドラマないし小説などにおいて、日本は欧米などの影響を受けているし、中国も欧米・日本・韓国などの影響を受けている。中国と日本のミステリ作品が全く懸け離れたものであるということはありません。ただ、日中の作品に傾向としての違いは確実に存在しており、本論文はそれを明らかにしようとするものである。

本テーマについては、日中いずれにおいても、先行研究が存在しない。

ページ数の都合により、論文は数回に分け発表、1回目は中国の作品に関する部分を掲載し、2回目～3回目前半は日本の作品に関する部分を掲載、3回目の後半と4回目・5回目は、作成した表などを使いつつ日中の比較をし、6回目の今回もその続きである。これにより、日中の映画の比較ができることはもとより、両国の社会や人々の意識の違いをも見て取ることができるものと思われる。

1.2 日本映画と中国映画の表について

「犯罪・ミステリー映画の日中比較（1）」（『名古屋学院大学論集（言語・文化篇）』Vol.31 No.2）、「犯罪・ミステリー映画の日中比較（2）」（『名古屋学院大学論集（言語・文化篇）』Vol.32 No.2）において、中国の2010年～2018年における毎年度の興行成績ランキングの上位（外国映画・香港

映画・台湾映画をも含む上位100位までに入るもの)の犯罪関連映画37本について、以下の58項目についてチェックし、表を作成した。

- 1 探偵が登場する。
- 2 探偵が登場する。自国を舞台とする作に限定。
- 3 探偵ないし探偵的な役割を果たす人物(警官以外)が登場する。
- 4 探偵ないし探偵的な役割を果たす人物(警官以外)が登場する。自国を舞台とする作に限定。
- 5 名探偵ないし名探偵的な役柄の人物の引き立て役となる無能な警官が登場する。
- 6 名探偵ないし名探偵的な役柄の人物の引き立て役となる無能な警官が登場する。自国を舞台とする作に限定。
- 7 プロの探偵が華麗に推理する。
- 8 プロの探偵が華麗に推理する。自国を舞台とする作に限定。
- 9 警官が無能と言うわけではない、ないし頭脳明晰。(警官がそもそも、ほとんどないし全く登場しない場合は△。)
- 10 警官が無能と言うわけではない、ないし頭脳明晰。自国を舞台とする作に限定。(警官がそもそも、ほとんどないし全く登場しない場合は△。)
- 11 推理・謎解きが重要な要素の本格推理。
- 12 視聴者は最初から犯人を知っている。
- 13 探偵・探偵役の人物ないし警察官が、皆の前で推理した内容を披露する。(推理内容が正しい、ないしほとんど正しい場合は◎。間違った推理が披露された場合も、正しい推理内容を推理する場面が後にあれば◎。)
- 14 警察官が主人公であったり警察組織を描くなどの警察もの。
- 15 警察官が犯人である。(警察官以外も犯人である場合を含む。)
- 16 警察組織の問題点に触れている。
- 17 警察と犯罪組織の対立、ないし警察による犯罪組織摘発をメインに描いている。
- 18 犯人を追い詰める警官や探偵などの心の苦しみを描く。
- 19 犯人の善良な面をも十分描いている。
- 20 犯人の苦しみを十分描いている。
- 21 犯罪者の内面に目を向け、犯罪に至らざるを得なかった過程を十分に描いている。
- 22 犯人が主人公。(犯人の立場から描く。)
- 23 無実の人物が、他人を庇い、その身代わりとなって、自分が犯人だと偽りの自首をする。
- 24 社会性のある題材を扱い、犯罪が起きた社会的背景をもしっかり描いている。
- 25 犯人に意外性がある。
- 26 犯罪方法やトリックに意外性がある。
- 27 凶器に意外性がある。
- 28 意外性が、犯人が誰であるかや、犯罪方法のトリックや特殊性以外にある。

- 29 犯罪が残虐，ないし猟奇的。サイコ性がある。
- 30 不気味，ないしホラー性がある。
- 31 連続殺人事件。
- 32 密室殺人事件。
- 33 科学的鑑定の場面がある。(プロファイラー以外)
- 34 プロファイラーが登場。
- 35 犯人が精神障害。
- 36 快楽殺人・快楽犯罪(殺人未遂を含む)。
- 37 ゲーム的殺人・犯罪や，劇場型の殺人・犯罪。(殺人未遂を含む)。
- 38 怨恨や復讐のための殺人・犯罪(殺人未遂を含む)。
- 39 他人への妬みないし社会的疎外感による殺人・犯罪(殺人未遂を含む)。
- 40 男女間の愛のもつれにより相手に行う殺人や犯罪(殺人未遂を含む)。
- 41 金銭ないし地位目当ての殺人・犯罪(殺人未遂を含む)。
- 42 口封じのための殺人・犯罪(殺人未遂を含む)。(自分の犯罪以外について他人に知られないための口封じをも含む)。
- 43 自分自身の欲望のためではなく，社会をよくする，ないし悪くしないためと考えての殺人・犯罪。
- 44 自分自身の欲望のためではなく，自分以外の誰かのための殺人・犯罪。(復讐は含めない)。
- 45 誘拐や監禁。
- 46 麻薬の売買。
- 47 企業・ビジネスがらみの犯罪を描いている。
- 48 テロリストによるテロ。
- 49 犯罪動機にオリジナル性。
- 50 他殺はなかった。(自殺，事故，未遂，その他のみ)
- 51 毒物の知識など実際の犯罪に役立てられそうな情報が入っている。
- 52 アクションが重要な要素として存在。
- 53 法廷推理もの。
- 54 スパイもの。(警官による潜入捜査は含まず)。
- 55 警官による潜入捜査がある。
- 56 トラベルミステリ。観光地・景勝地での旅情もの。
- 57 時刻表もの。
- 58 コメディ性がある。

中国の犯罪映画の表は，以下の通りであった。(表中の○・×などは，判断に主観の入らざるを得ない微妙なものもあり，絶対的に客観的に正しいものというのではなく，あらましの目安である。)

犯罪・ミステリー映画の日中比較 (6)

表 1

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞	㉟					
年度	2018					2017					2016					2015					2014	2013	2012					2011					2010							
大陸年度興行収入ランキングベスト100中、大陸制作作品（中国大陸以外との合作の場合、大陸の監督の制作によるものに限る。）の本数	32					37					30					40					40	23	25					33					30							
順位	二	四〇	四二	九八	九九	四四	五〇	五一	五九	六〇	七九	四〇	六七	九四	九七	一一	一三	四五	五九	八九	六七	九二	二七	三七	四三	六八	八三	九八	三八	七六	九四	九七	九八	三二	四六	六二	八〇			
映画名	唐人街探案2		“人”人物	幕后玩家	江湖儿女	龙野刑警	(机器之血：SF)		记忆大师：SFでもある。	(解忧杂货店：日本原作)		心理罪城市之光	绑架者	惊天大逆转	追凶者也	火锅英雄	捉迷藏	老炮儿	唐人街探案	烈日灼心	解救吾先生	黑猫警长之翡翠之星：アニメ		白灼火焰	笔仙惊魂3	无人区	全民目击	二次曝光	HOLD住爱	边境风云	笔仙惊魂	孤岛惊魂	硬汉2 泰隆到底	密室之不可靠岸	床下有人	B区32号	西风烈	决战刹马镇	密室之不可告人	黑猫警长：アニメ
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞	㉟	㊱	㊲	㊳	㊴	
1	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
2	／	×	×	×	×	×	×	／	×	×	×	×	×	×	×	×	／	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
3	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○		
4	／	×	×	×	×	×	×	／	×	×	×	×	×	×	×	×	／	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	同上	×	×	×	×	○	同上		
5	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
6	／	×	×	×	×	×	×	／	×	×	×	×	×	×	×	×	／	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
7	△別記	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△?別記	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△別記	×	×	×	×	×	△別記	×		
8	／	×	×	×	×	×	×	／	×	×	×	×	×	×	×	×	／	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△同上	×	×	×	×	×	△同上	×		
9	×	◎別記	△	△	◎別記	◎別記	◎	◎別記	×	×	△	△	◎?別記	◎	◎別記	△	×	×	◎◎別記	◎別記	◎?別記	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	◎		
10	／	◎同上	△	△	◎同上	／	◎	◎	×	×	△	△	△	◎?同上	◎同上	△	／	△	◎	◎同上	◎同上	◎同上	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	◎		
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞	㉟	㊱	㊲	㊳	㊴	
11	◎	×	×	×	×	×	△	△	△	×	×	×	×	△別記	×	×	◎	×	×	×	○	△	△	△	×	△	×	×	×	×	×	◎	×	×	×	×	◎	×		

12	×	○	×	×	△別記	○	×	×	×	○	×	△	×	×	×	○	×	△別記	○	○	×	×	○	×	×	×	×	○	×	×	×	○	×	×	○		
13	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○別記	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	×	×	×	×	◎別記	×		
14	×	○	×	×	○	○	○	×	○	×	○	×	×	○別記	×	×	×	○別記	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○		
15	×	×	×	×	×	×	○別記	×	×	○	×	×	×	×	×	×	△別記	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
16	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
17	×	×	別記	×	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○別記	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×		
18	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○別記	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
19	×	×	別記	×	○	×	×	別記	×	×	△	×	×	×	×	×	◎別記	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△別記	○別記	×	△	別記	×	×		
20	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞	㉟		
21	×	×	×	○	×	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
22	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	×	△別記	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△別記	×	×	×		
23	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
24	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
25	◎	×	○	×	△別記	×	×	◎別記	×	×	○	×	△別記	◎別記	○	×	◎	△別記	×	×	×	△	×	○	△別記	×	×	×	○	×	◎	×	○	×	◎別記	×	
26	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	×	×	×	△	×	
27	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△別記	×	×	×	×	×	×	×	
28	×	×	×	×	×	×	×	○	○	◎	△	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○別記	×	×	×	×	×	△別記	△別記	○別記	○別記	×	×	×	○別記	×	×
29	○	×	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
30	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	◎	×	×	×	×	×	◎	◎	×	×	○	◎	×	○	×	
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞	㉟		
31	○	×	×	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×		
32	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	
33	○	×	×	×	×	○	×	△	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○	△		
34	○	×	×	×	×	◎	×	◎	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
35	×	×	×	×	×	○	×	△	×	×	×	×	×	○?別記	○別記	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△別記	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
36	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		
37	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
38	×	×	○	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	△別記	○?	×	○	×	×	○	×	○	○	○	○	×	×	×	×	○	×	×	○	×	×	

犯罪・ミステリー映画の日中比較 (6)

[illegible]

日本の犯罪映画の表は、以下の通りであった。(中国の表同様、表中の○・×などは、判断に主観の入らざるを得ない微妙なものもあり、絶対的に客観的に正しいというのではなく、あらましの目安である。)

表 2

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞	㉟	㊱	㊲	㊳	㊴	㊵	㊶	㊷	㊸	㊹	㊺	㊻	㊼	㊽	㊾	㊿																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
年度	2018										2015				2014						2013									2012																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						

犯罪・ミステリー映画の日中比較 (6)

[illegible]

[illegible]

1.3 2022～2023年の犯罪ないしミステリー系の中国映画の紹介

「犯罪・ミステリー映画の日中比較（1）」を2019年に執筆し2020年3月に発表してから5年ほど経っており、現在は2024年となっている。中国映画の性質に変化が生じている可能性をも考え、「犯罪・ミステリー映画の日中比較（6）」における日中映画の比較分析のため、比較的最近の中国映画（2022年～2023年の映画）をも追加して見ておきたい。

「豆瓣」(<https://www.douban.com/doulist/243020/>)の2022年の「内地票房年度总排行(内地興行収入年度総ランキング)」に掲載されている興行収入Top137の映画、及び、2023年の「内地票房年度总排行(内地興行収入年度総ランキング)」に掲載されている興行収入Top144の映画のうち、以下の条件に合うすべての中国内地の犯罪・ミステリー系の映画について、ここで紹介することにする。計15作品が該当する。

香港や外国などとの合作の場合、監督が中国内地の監督である場合のみに限定。

中華人民共和国成立後を舞台とする作品に限定。(中華人民共和国成立後の時代を舞台としていれば、中国内地の監督による外国を舞台とした中国映画をも含む。)

孤注一擲 (孤注一擲) 2023年

多くの実際の詐欺事件をもとに作成された啓蒙的・教育的な意味を有する反詐欺犯罪映画。

電信詐欺事件を扱っている点で、同年の映画「鸚鵡殺 (鸚鵡殺)」や前年の映画「獵屠 (獵屠)」などと共通している。

プログラマーの潘生は、海外 (東南アジア) に拠点を置くゲーム企業 (それは嘘であるが、そのように聞いていた。) の高給な求人に惹かれて渡航するが、そこは中国の人々を海外から詐欺ネットカジノに誘導する詐欺犯罪集団のアジトで、そこでパスポートとスマートフォンを没収され、暴力により監禁され、オンライン賭博詐欺に従事させられる。反抗する者は徹底的に暴力で抑えられ、とうてい逃亡できそうにない。警察にも通報しようとするが、それができない。潘生はやはり高給を求めてやって来ていたモデルの梁安娜とともに脱出を図る。彼女もパスポートを没収され、脅されていた。先に梁安娜が脱出し、中国警察の警官・趙東冉らに保護され協力する。監禁されている潘生も、詐欺集団に気づかれずに警察に通報する方法を見出す。警察により詐欺集団のアジトが摘発され、潘生は救われる。組織は壊滅される。

潘生は詐欺集団のアジトでは、脅迫され暴力を加えつつも、そこを脱出しようとし、また警察に通報しようとするが、それができない。詐欺集団壊滅後、脅迫された中で犯罪行為に加担したことを証明し、また、被害者2千人余りの名簿を警察に提供したため、刑事責任は追究されなかった。

梁安娜は自首し価値ある行為をしたことにより、懲役2年、執行猶予2年となる。彼女は詐欺に加担した罪の意識、警察に通報しようとする意識が潘生に比べ弱かったように思われるが(脱出後、ネット賭博の被害者たちの状況を知り、犯人たちの逮捕に協力する。)、彼女もやはり騙されてアジトに連れて来られ、脅されやむを得ない状況下で詐欺に加担することになった被害者であることには変わらない。

詐欺集団のボス・陸秉坤は残虐・冷酷・悪辣な詐欺師、悪人として描かれている。(ただし、警察にアジトに踏み込まれた時、自分の小さい娘・月婷を母親のもとに連れていくよう潘生に頼み、また、詐欺集団が警察に取り押さえられた際、潘生に、データの入ったスマートフォンを渡さなければ月婷についての頼みを聞かないと言われ、スマートフォンを潘生に渡そうとし、そこに親としての情が見て取れる。[もっとも、陸秉坤は証拠となるデータを消去させる罠をも用意していたが。]) しかし、それらは、彼の冷酷・残虐・悪辣な詐欺師という基本的な印象を変えるものものではない。) 彼は詐欺・監禁だけではなく、暴力・傷害・殺人なども行っており、死刑の判決が下される。

陸秉坤の手下の安俊才も、残虐・冷酷・悪辣な詐欺師、悪人として描かれている。詐欺・脅迫・暴力・傷害など平気で行う悪人・恐ろしい人物として描かれている。(ただし、梁安娜が多少好きで同情したためか、梁安娜の逃亡を助ける。そこには彼の優しさが表れてはいるが、どう見て

も悪人である。)

映画の最後には、事件解決後に市民啓蒙の講演の場において、趙東冉が「裁判所は、陸秉坤を詐欺・監禁・故意殺人など多くの罪名の容疑で死刑に処した。梁安娜は自首し功を立てた経緯から、懲役2年・執行猶予2年の判決が下された。潘生は自分の行為が脅迫のもとで行われたものであることを証明し、かつ二千人余りの被害者の名簿を提供したため、刑事責任は追究されなかった。(法院判決陆秉坤, 涉嫌诈骗、绑架、故意杀人犯等多项罪名, 处以死刑。梁安娜有自首立功情节, 判处有期徒刑两年、缓刑两年。潘生证明了自己的行为是在胁迫下进行的, 并提供了两千多名受害者的名单, 不予追究刑事责任。)」と話し、かつネット詐欺犯罪被害の大きさを語り、反詐欺センターにおいて趙東冉のもとで技術顧問をしている潘生は、自分の経験を語り、ネットカジノ詐欺の被害者の恋人の宋雨は、事情を知っている者は声を上げ情報を提供するようにと話し、梁安娜は、自分たちの話を通じて何が信じるべきことかをはっきりと知ってほしいと話す。反ネット詐欺について人々を啓蒙する内容となっている。

その後、以下の字幕が現れる。

「2022年末までにおいて、公安部門は電信ネット詐欺事件を計115.6万件検挙し、容疑者155.3万名を捕らえ、事件関連の資金9165億元余りを支払い停止・凍結とし、9385万名の群衆に忠告し、彼らが騙されるのを防ぎ、挽回した経済的損失を累計すると2861億元余りであり、強力に人民群衆の財産の安全と權益とを守った。(截至2022年底, 公安部门共破获电信网络诈骗案件115.6万起, 抓获犯罪嫌疑人155.3万名, 止付冻结涉案资金9165余亿元, 劝阻9385万名群众免于被骗, 累计挽回经济损失2861余亿元, 有力维护了人民群众财产安全和合法权益。)」

最後のこの字幕部分は、被害者を増やさないための啓蒙というよりも、政府の宣伝としての啓蒙となっている。(捕らえた容疑者の数の実績を誇る姿勢が冤罪を生むことに繋がらないか、気になるところではある。)

以下の項目において、「犯人」「犯罪者」とは陸秉坤と安俊才を指す。潘生や梁安娜のような暴力と監禁により脅迫され犯罪に加担させられていた者は含んでいない。彼らも犯罪に加担した者ではあるが、本論文において、他作品については、そうした脅迫によって犯罪を行わざるを得なかった人物(被害者)については、基本的に「犯人」や「犯罪者」としてカウントしなかったからである。これらの項目でチェックしたかったのは、悪人であるはずの犯罪者に善の面もあるように描いているかどうかであるが、こうした脅迫により犯罪をせざるを得なかった者については、そもそももともと悪人とは言えないと思われるからである。(ただし、もし「犯人」「犯罪者」に彼らを含むのであれば、19～22はいずれも○になる。)

18 ×

19 × (ただし、上に記したように、100%全く書いていないわけではない。)

20 ×

21 ×

22 ×

消失的她 2023年

東南アジアの国が舞台となっている。

ハネムーンの旅先東南アジアの国で主人公・何非の妻・李木子がいなくなって半月経った。

何非は捜索するように警察に訴えるが、厄介者扱いされて取り合ってもらえない。警察署を出た帰り際、華僑だと言う警官・鄭が現れ、手伝ってくれるという。

宿泊しているホテルの部屋で酒を飲んで起きると、なんと横に妻だと主張する知らない女が寝ている。しかし、それは明らかに妻ではないと思う。ただ、その女の見せるスマホの画像を見ると、何非とその妻と主張する女は、二人で親しそうに映っており、その女は妻であるかのように見える。

警官の鄭が来て聞き取りをするが、パスポートを確認しても、その女は確かに何非の妻・李木子である。鄭や何非のいくつかの質問に対しても、その女は問題なく答えられる。妻だから知っているような回答をする。また、ホテルの部屋係の女も、その女は何非の妻だと証言する。鄭は、警察から送られてきたばかりの資料の画像を見ても、その女は何非の妻だと言う。何非自身のスマホの画像を見てもらおうとしたが、なんとそこには、何非とその妻と主張する女が二人で親しそうに映っていた。鄭は妻と主張する女の言うことを信じる。

妻と一緒にいったことのある店に鄭を呼んで、防犯用の録画を見せてもらおうとするが、なんと先に妻と主張する女が来ていた。鄭が録画を見ると、そこに映っているのも妻と主張する女だった。何非は精神系の薬を常用しており、女は、薬を常用している何非の健忘・妄想と暴力がひどいと鄭に信じさせ、鄭を完全に味方につける。鄭は、失踪した妻の調査申請は却下すると何非に告げる。

何非は著名な敏腕弁護士・陳麦に依頼し、事情を話して妻と称する女の陰謀を明らかにしてもらおうとする。何非は陳麦とともに真相を探る。

何非の妻と称する女やその仲間は、大金持ちの李木子と結婚して大金を持っている何非を精神病だとして精神病院に入れ、精神病患者の直属の家族、つまり後見人としての権利により、何非の財産を奪おうとしている。

陳麦は真の李木子を探す必要があるという。

陳麦は調査により、今回の事件に関わるとされるある会社が、これまで東南アジアの富商の失踪事件と関わっており、いずれの場合も、富商の財産は家族と称する者によって接収管理されているということを明らかにする。

何非や陳麦は犯人グループにより命まで狙われ、何非は彼らに捕まる。陳麦は殺人の冤罪を着せられ、指名手配されていた。実は鄭も犯人グループの一員であり、グループは巨大な勢力を有していた。

ストーリーはこのように進んでいくが、ストーリーが進むと、驚くべきことが明らかになる。実は何非こそが李木子の財産を得るために計画を立てて李木子を殺害した張本人だった。妻が失

踪したというのは嘘だった。

そして更に驚くべきことが明らかになる。偽りの妻や警官・鄭やホテルの支配人、録画した店の店員らを含め、犯人グループが何非の財産を狙っているという話そのものが、すべて陳麦・本名沈曼が仕組み監督として演じさせた壮大な劇に過ぎなかった。沈曼は李木子の唯一の親友だった。彼女は真に李木子のことを思う人物だった。李木子が失踪したという件で何非を疑い、李木子の行方を明らかにするために自分の劇団の多くの人物を使って劇を演じさせ、何非に李木子の居場所を言わせたのだった。

何非は妻を殺した件で警察に逮捕される。

沈曼は李木子から、自分たちの子供ができたことを何非に伝えるつもりだったことを聞いており、そのことを獄にいる何非に伝える。何非は破廉恥にも妻の殺害を後悔していない全く無反省な様子で獄中にいたが、李木子に自分との子供ができていたことを知って泣く。沈曼は無念に死んだ李木子のことを思って泣く。

映画の最後に以下の字幕が現れる。

「何非は、故意殺人罪を犯したことにより、死刑の判決を受け、ただちに処刑された。沈曼は、騒乱挑発罪、他人の住所への違法侵入、違法拘束等の行為により警察に拘留された。その態度が良好でありかつ功績があったため、刑事拘留30日の判決を受けた。鄭成・帕敢・Janc等M劇団のメンバーは、強制出国させられ、かつ一生、巴蘭迪亜への入国が禁じられた。(何非、因犯故意殺人罪、被判处死刑，立即处刑。沈曼，因寻衅滋事罪，非法侵入他人住所，非法拘禁等行为被警方拘留。念其态度良好且有立功表现，被判处刑事拘留30天。郑成，帕敢，Janc等M剧团成员被驱逐出境等并被终身禁止入境巴兰迪亚。)」

映画のストーリー等の上で考えると、この字幕は不要のように思われる。罪・処罰を明確にし犯罪者を増やさないようにするという政府の姿勢があり、審査を通すために加えられた字幕と言えよう。

18 ×

19 ×

20 ×

21 ×

22 △ (犯人・何非が主人公ではあるが、犯人としての立場から描かれた作ではない。)

23 ×

堅如磐石（堅如磐石） Under the Light 2023年

警官・蘇見明は、副市長の鄭剛の息子である。(蘇見明は始め、鄭剛の養子だと思っているが、実の子である。)父とは違い地位の低い(市公安局の刑事技術科副科長)目立たぬ警官であるが、真の警官になろうという強い正義感を持っていた。父・鄭剛も清廉な副市長のように振舞っていた。

ある一人の犯人が、鄭剛を狙うバス立てこもり爆弾事件を起こす。犯人が爆死して終わるが、

蘇見明もこれを捜査するチームに参加する。(地位は低く技術科でもあるが、この事件の捜査に中心的に関わることとなる。)爆破事件には裏があった。まず、父の友人である大企業・金五グループ社長・市政協委員の黎志田が背後にいたと思われ、蘇見明は捜査する。

捜査とともに、鄭剛・黎志田らの悪事が明らかになる。

実は、爆破事件を実行犯に行かせた黒幕は鄭剛だった。鄭剛は黎志田が疑われるように仕向けていた。

鄭剛は清廉そうに振舞っているが、実は腐敗した人物であり、黎志田と結託して数多くの悪事に手を染めていた。かつて、愛人・朱麗(蘇見明は最後あたりまで知らないが、彼の生みの親である。)をも、自分の出世・前途のため、黎志田と協力して殺していた。そしてそのことを黎志田とともに隠している。賄賂を受け取り、犯罪的企業組織の犯罪行為を摘発せず放任する。

黎志田も腐敗した冷酷で残虐な人物で、数々の悪事を働いてきた。朱麗を殺害しているし、婚約している娘・黎莎を裏切って不倫するDavidを惨殺したりもする。また、鄭剛の妻・何秀麗の指示を受けてではあるが(何秀麗の指示を受けてとは言っても、何秀麗に鄭剛・楊曉薇の関係を知らせ、故意に怒らせてそう指示させたものである。)、朱麗の死の真相の証拠を得た朱麗の姪・楊曉薇を口封じのため拉致し、脅迫し殺そうとする。その他にも数多くの犯罪に手を染めている。黎志田が船上で、おしになっているいところに対し、いとこが裕福で自分が昔貧しかった頃いじめられていたことの意趣返しとして、常軌を逸した残酷ないじめとしか言えないような態度で接したり、金五グループ主任で鄭剛の友人である李金泰に、煮えたぎる熱い火鍋の中から手で携帯を取り出すよう脅迫し強いる場面があるが、それらのシーンでも、黎志田の冷酷さ・残忍さが際立っている。

この映画においては、犯罪者たちの人間味のある部分も描かれている。(なお、この映画に犯罪を犯す者は多く登場するが、この映画での主要な犯罪者は鄭剛と黎志田であるといえる。)例えば、鄭剛が楊曉薇によくし彼女を守ろうとしたり(彼女の世話をしよう朱麗に頼まれていたらしい。また、楊曉薇の容姿がおば・朱麗にとっても似ている。)、黎志田が自分の娘・黎莎に強い愛情を注いだりするなどがそれである。ただし、基本的に、犯罪者が善人として描かれているわけではないし、好意的に描かれているわけでもない。

映画最後あたりの画面は、犯罪者たちが判決を受けている犯罪者ごとの画像であり、そこに以下の字幕が付されている。

鄭剛は故意殺人罪、収賄罪、反社会的組織を底い黙認する罪を犯し、それら複数の罪を合わせて罰し、死刑を執行し、終身にわたり政治権利を剥奪することを決定し、更に個人のすべての財産を没収し、収賄したあらゆる財物及びそれによる収益を追徴した。(鄭剛犯故意殺人罪、受賄罪、包庇纵容黑社会性质组织罪、数罪并罰、決定执行死刑、剥夺政治权利终身、并没收个人全部财产、追缴受贿所得财物及孳息。)

何秀麗は故意殺人罪、収賄罪、贈賄罪を犯し、それら複数の罪を合わせて罰し、無期懲役とするとの判決を下し、終身にわたり政治権利を剥奪し、更に個人のすべての財産を没収し、収賄したあらゆる財物及びそれによる収益を追徴した。(何秀麗犯故意殺人罪、受賄罪、行賄罪、数罪并罰、

判无期徒刑，剥夺政治权利终身，并没收个人全部财产，追缴受贿所得财物及孳息。）

黎志田は反社会的組織を組織・指導する罪，故意殺人罪，言いがかりをつけて挑発しめ事を引き起こす罪，違法採鉱罪を犯し，それら複数の罪を合わせて罰し，死刑の執行，終身にわたる政治権利の剥奪を決定し，更には個人の全財産を没収した。（「黎志田犯组织领导黑社会性质组织罪，故意杀人罪，寻衅滋事罪，非法采矿罪，数罪并罚，决定执行死刑，剥夺政治权利终身，并没收个人全部财产。」）

金五グループの黎志田らは，反社会的組織であると認定され，法により厳罰を受けた。（金五集团黎志田等人被认定为黑社会性质组织，依法受严惩。）

高進渉は国有資産の違法横領の容疑で，立件・調査された。（高进涉嫌非法侵占国有资产，被立案调查。）

鄭剛・黎志田事件と関係のあるその他の多くの役人は，罪を恐れて密かに海外逃亡し，任務を通じ，そのうち6名はすでに引き渡されて帰国し，法律の審判を受けた。（与郑刚，黎志田案相关其他涉案的多名官员畏罪潜逃海外，经工作，其中六名已被引渡回国，接受法律审判。）

そのあと，楊曉薇が公安機関により救い出されたこと，殉職した警官・李惠琳が公安部により烈士とされたことなども字幕として書かれ，更にそのあとに，2022年5月から施行された「中華人民共和国反有組織犯罪法」が中国最初の専門的・系統的に十全に反組織犯罪任務を規範した法律であり，それは党中央の犯罪組織・違法行為一掃闘争の大きな成果であり，組織犯罪の蔓延を抑制し，更に高いレベルの安全な中国，法治中国の建設を推進し，人民の安穩な暮らし，社会の安定・秩序を確保し，国家が長期にわたって安定するために，強力な法治の保障を提供するものである，という内容の字幕が現れる。

このように，犯罪映画において，最後に字幕で犯罪者がどのような罪となったかを書くことは，中国では非常によく見かけられるものであり，この作品の場合は，更に，党中央による犯罪組織・違法行為一掃闘争の宣伝とも言える文までも書かれている。国による審査制度のある中国ならではのものと言えよう。

18 ×

19 ×

20 ×

21 ×

22 ×

23 ×

三大隊（三大隊） 2023年

程兵は警察の三大隊の隊長として活躍していた。ある時，14歳の少女が自宅で強姦・殺害される強盗殺人事件が発生。三大隊は容疑者の1人・王大勇を発見したが，感情的な取り調べから彼を殴り死なせてしまい，みな有罪となり警察を辞めることとなる。

刑務所での6年間の服役の後に出所した程兵は、同じく服役した以前の三大隊のメンバーのうち1人を除く3人と共に、再び残る犯人・王二勇を探し始める。警官でもない彼らは、犯人の手がかりを探る。しかし、長い年月にわたり各地を回り捜査を続けても、王二勇を見つけることができず、三大隊のメンバーは、一人また一人と去ってゆく。程兵は一人になっても、執念で犯人を追いつける。しかし、刑務所で助けた阿哲が、程兵の代わりに犯人を追ひ、殺されてしまう。程兵はもう犯人を追うのをやめようと決心したところで、重要な手がかりに気づき、犯人を見つけ、警察による犯人逮捕・事件解決に導く。

少女殺害事件の犯人（王二勇と王大勇）

あくまでも犯罪者として描かれており、その善良な部分が描かれているといったことはない。

なお、映画の最後には、「王二勇は、強姦罪と故意傷害致死罪により、2014年に死刑の判決を受け、政治権力を終身にわたり剥奪された。（“王二勇、因犯强奸罪和故意伤害致人死亡罪，于2014年被判处死刑，剥夺政治权力终身。”）」との字幕が出る。犯罪者がどのような刑に服することになるかを最後に字幕で書くことは、中国の犯罪映画によく見られるものである。これによって審査を通りやすくするという意味もあるのであろう。

程兵ら三大隊のメンバー

三大隊が少女強姦殺人事件の犯人を追う中で、師匠で引退間近の張青良が、必死に走って犯人を追ひ、ほどなく脳出血で死亡する。（張青良は自らの老いを認められず、三大隊のメンバーには、自分は犯人とぶつかって転倒したと話す。）三大隊の5人は、捕まえた容疑者（犯人）・王大勇を取り調べるが、彼は、犯され殺された少女をも侮辱するふてぶてしい態度をとる。その時、張青良が病院で亡くなったとの知らせが入り、三大隊の皆は怒って王大勇に自白させようとし、一人は王大勇に殴りかかろうとする。その際、娘の写真の貼られた程兵の携帯を見て王大勇がいやらしくふてぶてしく笑う。それを見て、皆は腹が立ち、犯人を殴り倒し、その結果、王大勇は死亡する。（王大勇は捕まった際、怒った民衆にぼこぼこに殴られており、そのため簡単に死亡したのかと思われる。）三大隊の5人は、故意傷害罪により全員有罪となり、数年間刑務所で服役する。彼らもまた犯罪者となってしまうが、この映画のストーリーにおいて犯人として描かれているのは、程兵ら三大隊の隊員ではなく、あくまでも彼らの追う強姦殺人事件の犯人であると言えよう。

なお、隊長・程兵を始めとした三大隊のメンバーは、有罪となり警察を辞め服役するが、すべてを失っても警官だった者としての本分を尽くそうとする正義感のある人物、善人として、好意的に描かれている。特に程兵は、信念を貫き通し事件を解決した人物として格好よく描かれている。

19～22について：程兵を始めとした三大隊の5人も犯罪を犯しているが、この映画における「犯人」「犯罪者」とは、彼らの追う犯人であると見るのが自然であろう。映画の最後の字幕に書かれている犯罪者も、もちろん王二勇である。

- 18 ×
- 19 ×
- 20 ×
- 21 ×
- 22 ×
- 23 ×

拯救嫌疑人 2023年

韓国映画「세븐데이즈 (セブンデイズ)」(2007)をリメイクした作。

おそらく悪質な犯罪者である警察官や検察長が登場するためであろうが、場所・背景は中国ではなく華人の多い外国という設定になっている。

丹温・特査は、残虐な方法で梁昕苑を殺害する。小動物に対しても優しいと見せ、実は人の目のない所では、動物に対しても残虐である。明らかに悪人として描かれている。映画のほぼ最後に出てくる字幕においては、「新たな証拠が出たことにより、丹温・特査は再度訴訟を受けることとなり、最終公判において死刑の判決を受けた。(因出现新的证据, 丹温・特査再次被诉讼, 终审被判处死刑。)」と書かれている。

検察長である安華・阿都拉曼は、息子である納吉・艾哈邁德が梁昕苑を殺害したと誤解し、息子を守るために、証拠隠滅・公文書偽造・贈賄などをし、また手下をも使い、納吉・艾哈邁德が梁昕苑を殺害したと考えていた陳智琪や刑事・金志雄を謀殺しようとする。息子思いではあるが、悪人として描かれていると言えよう。映画のほぼ最後に出てくる字幕においては、「証拠隠滅罪・公文書偽造罪・贈賄罪・謀殺罪により、安華・阿都拉曼は無期懲役の判決を受けた。(因毁灭据罪、伪造公文罪、行贿罪、谋杀罪, 安华・阿都拉曼被判终身监禁。)」と書かれている。

林淑娥は、娘・梁昕苑を殺害された母親であり、彼女が真犯人であると知っている丹温・特査を法廷で無罪にし、彼に対し、法の裁きではなく自らの手でリンチを加え殺すため、何の恨みもない敏腕弁護士・陳智琪の娘を誘拐し、丹温・特査の弁護を引き受けて丹温・特査を無罪にさせなければ娘を殺すと陳智琪を脅迫する人物であり、異常で常軌を逸している。無罪となり釈放された丹温・特査に対する私刑は、違法であり、また非常に残虐なものである。また、丹温・特査に私刑を加える際、彼を私刑から救おうとする陳智琪の首にナイフを当てる。林淑娥は、真相を知りつつ、自らの復讐の達成のために裁判を真相から遠ざけようとした人物でもある。気の毒な人物ではあり、愛情深い母親でもあるが、完全に常軌を逸している。復讐の思いからとはいえ、この行為は到底許されるものではなかろう。ただし、誘拐した陳智琪の娘に対してはとても優しい。(その優しさは、映画の終わりあたりで、十分強調して描かれている。)殺された自分の娘に対しても愛情深いので、それは当然かもしれないが、林淑娥は悪人として描かれているとは言えない。彼女のこの作品は、林淑娥については、その常軌を逸した犯罪とともに愛情深さをも描いているとも言えよう。

犯罪者には、林淑娥の指示で陳智琪の娘や丹温・特査の誘拐・拘禁などを行った胡育森(映画

のほぼ最後に出てくる字幕においては、「誘拐罪・不法拘禁罪により、胡育森は懲役五年の判決を受けた。〔因绑架罪、非法拘禁罪，胡育森被判为有期徒刑五年。〕」と書かれている。）や、安華・阿都拉曼から賄賂を受け取り事件の真相をもみ消そうとした警察官・廖広生（映画のほぼ最後に出てくる字幕においては、「洗職罪・収賄罪により、廖広生は懲役7年の判決を受けた。〔因渎职罪，受贿罪，廖广生被判为有期徒刑七年。〕」と書かれている。）らもあり、また、主人公の陳智琪も司法公正妨害罪に問われている（映画のほぼ最後に出てくる字幕においては、「司法公正妨害罪により、陳智琪は懲役一年，執行猶予二年，二年間の業務停止処分の判決を受けた。〔因妨碍司法公正罪，陈智琪被判为有期徒刑一年，缓刑两年，暂停执业两年。〕」とされている。）が、ストーリーの上では、丹温・特査，林淑娥，安華・阿都拉曼がメインの犯罪者であると思われる。（なお，林淑娥は死亡により，刑には問われない。）

この映画において，丹温・特査，安華・阿都拉曼ら犯罪者は，悪人として描かれている。ただし，林淑娥については，その娘を思う気持ちは理解できるものであり，また誘拐した陳智琪の娘に対する優しさも十分に描かれている。単純に彼女を犯罪者として描いているのではなく，その常軌を逸した犯罪とともに，その愛情深さをも描いていると言えそうである。

なお，実は原作の韓国映画「セブンデイズ」においては，娘を殺されその復讐をしたハン・スッキ（「拯救嫌疑人」では林淑娥に相当する。）は，直接自らの手で残虐な私刑を行おうとした林淑娥と違い，直接自分自身の手によっては残虐な復讐をしてはおらず，また自首したわけではない林淑娥と違い，自ら自発的に自首しているにも関わらず，「拯救嫌疑人」の林淑娥ほど同情的に描かれてはいない。（「拯救嫌疑人」のようにその優しさが強調して描かれている部分がない。）日本人の筆者から見ても（もっとも，筆者が日本人の平均からずれている可能性もあるが），娘の復讐をする林淑娥が過度に同情的に描かれているようにも感じる。明確なデータなどは見たことがないが，中国では単に歴史的・伝統的というだけでなく，現在でも親族の仇討ちのための殺人に対し共感しやすい社会であるということかもしれない¹⁾。

18 ×

19 △ (×) △ (林淑娥のみについては，ある程度描かれている。丹温・特査その他の犯人については描かれていない。)

20 △ (林淑娥のみについては，彼女の犯罪をしたことによる苦しみではないが，犯罪の原因となった苦しみは，一定程度は描かれている。丹温・特査その他の犯人については書かれていない。)

21 △ (林淑娥のみについては，「過程」を描いたとは言えないものの，なぜ犯罪に至ったかは，しっかり伝わるように描かれている。丹温・特査その他の犯人については書かれていない。)

22 ×

23 ×

涉过愤怒的海（涉過憤怒的海） 2023年

主人公・金隕石は、海で漁をして生計を立てていた。ある日、離婚した妻・顧紅から連絡を受ける。日本留学中の娘・金麗娜が失踪して連絡が取れないという。金隕石は娘の安否を確認するため東京に赴き、中国人留学生の交際相手・李苗苗に連れ出されたのではということ聞き出す。金は李苗苗の消息を掴み、留学先の京都に向かう。李苗苗本人と接触することに成功するが、逃げられてしまう。李苗苗は身元がばれて慌て、中国に逃げ帰った。やがて金隕石は、娘が17ヶ所刺された姿で遺体となって発見されたとの連絡を受ける。東京で娘の遺体と対面した金隕石は、自らの手で李苗苗を探し、娘のために復讐しようとする。

李苗苗は精神的に病的に歪んだ悪い人物なのだが、結局、映画の終わり近くで、真実は、金麗娜は自分の愛を苗苗に証明するために、自傷行為で人生を終えることを選び、タンスの中に身を隠して静かに死を待った、つまり自殺したということが明らかになる。金麗娜の死は、苗苗によるものでも、他の誰かによるものでもなかった。

ただ、表面的に言うとうそではあるが、実は金隕石自身が真の意味では娘を愛しておらず、金麗娜は愛情を受けて育たなかったために自殺を選んだのである。金麗娜は親から愛情を受けなかったために、誰かがちょっと気遣ってくれれば、何でもするようになった。李苗苗が金麗娜を疑って追い払おうとしたとき、金麗娜が自分の愛を証明するために自殺を選んだのはそのためである。娘・金麗娜の精神を病的に歪めて彼女を殺したのは、父親の金隕石だとさえ言えたのである。

映画のほぼ最後に、以下の字幕が現れる。

「李苗苗は、武器の不法所持、傷害等の罪名で逮捕することが〔人民検察院より公安機関に〕許可された。金隕石は、住居侵入、刀を持って凶行に及んだこと、違法監禁等の罪名で逮捕することが〔人民検察院より公安機関に〕許可された。戴震も相応の処分を受けた。金隕石は出獄した後、漁船を売り払い、一生の貯蓄を寄贈し、かつ青少年の精神の健康の救済のための公益活動に身を投じた。（李苗苗因非法持械、伤害他人等罪名予以批捕。金隕石因私闯民宅、持刀行凶、非法拘禁等罪名予以批捕。戴震亦受到相应的处分。老金出狱后，卖掉渔船，将毕生积蓄捐赠，并投身于青少年心理健康救助公益活动。）」

そのやや後、映画の最後に、以下の字幕が現れる。

「ただ父母の愛だけが、人の一生の最初と最後の“安全な島”なのである。（唯有父母之爱，人一生最初与最终的“安全岛”。）」

これらの字幕は、犯罪を犯した者はどうなるかを明確に示し、社会道徳を伝える内容となっている。加えるのはおかしいというものでもないかとも思うが、ストーリー上、必ずしもなくてもいい部分のように思われる。審査を通すために必要な部分でもあるのだろう。非常に中国的な部分である。

主人公である金隕石は、李苗苗の父・李烈の家に密かに侵入し刃物を持って暴力を振るったり、コスプレ会場で李苗苗を見つけ（警備員に止められるが）ロープで絞殺そうとしたり、竜巻の日 に事故で乗っていた車が動けなくなった李苗苗を車から強引に引きずり下ろし、彼を海上の灯台

に監禁したりもする。細かく見ると、彼の行為で犯罪となるのではないかというものはかなり多い。彼も犯罪者である。(もっとも、金隕石を車で引き殺そうとして車ごと海に落ちた李苗苗の母親を救っているが。) 実は娘を愛してもいなかった。彼は悪人とは言えないかもしれないが善人とは言えず、少なくとも全くまともではない。(もっとも、上述のように、映画のストーリーがすべて終わってから、最後の字幕において、彼が自らの生き方を変えたことが書かれているが。)

李苗苗の母親・景蘭も、未遂だが金隕石を車で引き殺そうとしており犯罪者であり、また息子・李苗苗との関係が変で、李苗苗が何をしてしても許し、彼を甘やかして性格的に歪めてしまうなど、やはりまともではない。殺された被害者の金麗娜も、上記のように性格的に異常に歪んでいる。

李苗苗も、幼少期から悪行が多く、祖母が病気で危篤になりそのため日本に遊びに行けなくなったため、医療用の管を外して祖母を殺してしまったり、妹をトランポリンで無謀に遊ばせて半身不随にさせてしまったり、乞食に与えるハンバーガーに剃刀の刃を隠したり、実の妹や父・李烈の現在の妻のもとに強酸のおもちゃを送りつけ重傷を負わせたり、コスプレ部員のカツラにライターで火をつけたり、幼少期からの異常に甘やかし何でも許す親との関係から来ているのではあろうが、全くまともではない。犯罪者である。

李苗苗の3人の悪友も、金麗娜を輪姦して動画を撮るなど、全くまともではないし、犯罪者である。

李苗苗の父・李烈も、表面上は息子を大切にしているが、実は息子の悪行のため、すでに関係を絶っており、金麗娜の殺害事件に乗じて李苗苗を刑務所に入れたいと思っていた。誰かが殺してくれればありがたいとすら思っている。船上での金隕石との対話中に感情のコントロールが効かなくなり、バールで力づくで金隕石に襲いかかった。まともではないし、犯罪者とも言えよう。

この映画にはまともではない人間や犯罪を犯す人間が数多く登場する。

しかし、そうは言っても、この映画を見ている際、犯人・犯罪者と言えば、皆まず金麗娜を殺害した人物のことを考えるはずである。(この映画は、金麗娜の側にこそ非常に大きな問題があったとはっきりわかるのは、話が相当進んでからであり、また金麗娜が殺されたのではなく自殺したのだとわかるのは、映画もほとんど終わりになってからである。) 金麗娜は自殺したのであり、彼女を殺害した者はそもそもいなかった。以下18～23は、そうした視点にもとづいて記入する。〔もし犯罪を犯した者すべてを犯人・犯罪者として記入するのであれば、18～23の記入内容が多少変わるだろう。そうした視点から記入した場合は () 内のようになるかと思われる。〕

18 × (×)

19 × (×)

20 × (△：少なくとも、犯罪を犯したことによる苦しみは描いていない。)

21 × (△)

22 × (×：金隕石が主人公であるが、犯人としての立場というより、被害者としての立場から描いていると思われる。)

23 × (×)

河边的错误（河辺の錯誤） 2023年

（原作は余華の小説であるが、映画は原作から独立した別の作品であると考え、以下、あくまでも映画作品に即して書いていく。）

舞台は90年代の中国。川辺で老婆の遺体が発見される。刑事である主人公の馬哲が事件の捜査を指揮する。殺された老婆が引き取り育てていた精神障害者（「瘋子」）が有力な容疑者となり、局長は彼を犯人とし、事件を解決済みとしようとするが、更に他の遺体も見つかっていく。馬哲は何かおかしいと感じ、捜査を進めるが、彼は次第に幻覚を見るようになり、何が現実か分からなくなっていく。

馬哲が精神を病み、彼の幻覚かと思われるシーンも出てくる。作品を最後まで見ても、それらの内、どこまでが現実なのか、どこが幻想なのかが、判然としない。そもそもポスターには「没有答案（答えがない）」と書かれていた。この映画作品を見てみると、判断を視聴者に委ねていやすく、誰が殺人をしたか、死者となった者はなぜどのように死んだのかといったようなことを視聴者に明確にさせないまま、作品が終わっている。作品の後ろの方に次のような場面がある。馬哲は自分が殺人犯・瘋子を殺したと思うが、そのことを局長に話し、局長に言われて自分の拳銃に残る弾丸の数を数えると、打ったはずの弾丸の数（4発）と残された弾丸の数が合わない。弾丸は7発すべて残っていた。とすると、この映画作品において馬哲は、幻覚を見ただけで、瘋子を殺してはいないということになっているらしく思われる。しかし、真実がやはり判然としない。そもそも、誰が真に殺人を犯し、死者はなぜどのように死んだのか、といったこと自体が、この作品においてとても重視されているわけではないのかもしれない。

この映画作品は、謎解きを重んじた娯楽サスペンスではなく、心理や全体の雰囲気（16ミリフィルムで撮影され、陰影に富む色彩の画面や音楽が印象的な作品である。）を重んじた芸術作品として作成されているように思われる。

馬哲が瘋子を殺したかなど判然としない点が多いが、殺してないとすると、日中映画比較表は以下の（）以外になる。殺しており彼もまた殺人者であるとする、以下の（）内になる。

- 18 × （×18の「犯人を追い詰める苦しみ」とは「捜査の中で犯人を追い詰めて罪に問うことの苦しみ」の意で書いてきた。それを描いているとは言えない。）
- 19 × （△瘋子の善良な面を描いてはいるとは言えない。馬哲については、殺人者を野放しにしてはいけないと考え瘋子を殺害したのかとも思われるが、その殺害はもはや正義や善と言うより狂気にも見える。）
- 20 × （×馬哲は苦しみから殺人に至ったとする、人を納得させうる描写や説明があるわけではない。）
- 21 × （×馬哲は苦しみから殺人に至ったとする、人を納得させうる描写や説明があるわけではない。）
- 22 × （×最後の方で、馬哲もまた殺人者になる。ただし、馬哲が主人公であるとはいえ、大

方の時間においては犯人の立場から描いた作品とは言えず、また終りの方でも馬哲の精神に問題があり真実が曖昧で、犯人の立場から描いた作品とは言いにくいように思われる。)

23 × (×)

怒潮 2023年

香港との合作映画であるが、監督は内地（大陸）の監督である。

東南アジアが舞台と思われる。

洪泰集団（洪泰グループ）は、犯罪組織からまっとうな企業へと体裁を変えようとするが、誘拐・人身売買・臓器売買・殺人などをしてきた犯罪組織である。

警官・麦朗汶隊長は、正義感あふれる信頼する上司を 洪泰集団に殺された。腐敗した警官のように見えるが、それは実は悪徳局長オーエンの信頼を得るためであり、悪人ではない。

陳安は、妹・陳楽を洪泰集団に殺された。洪泰集団会長の娘・莎莉が心臓移植を必要とし、そのために、陳楽が洪泰集団に拉致されて心臓を摘出され、死亡したのである。陳安はそのため、洪泰集団に復讐しようとしている。

馬文康は、恋人・陳楽を洪泰集団に殺され、警官・麦朗汶の提案に乗り、復讐のため洪泰集団に潜入、潜入の都合上、ばれないように洪泰集団の一員として悪事にも手を染めている。

これら陳安・麦朗汶・馬文康3人は、裏で手を結んでいる。もともと、陳楽殺害の事情を知らせて洪泰集団の逮捕への協力を求めたのは警官・麦朗汶である。

この映画での悪役は、まずは洪泰集団であり、またそれと結託する警察局長・奥恩〔Auen オーエン〕、検察長・賽因らである。

馬文康は洪泰集団との戦いで死亡するが、陳安・麦朗汶・馬文康の活躍により、洪泰集団は壊滅、幽閉されていた多くの若い女性たちも救い出され、また警察局長・検察長が洪泰集団と繋がっていた証拠も得られる。

腐敗した警察や検察を描くため、中国ではなく国外を舞台としているのであろう。

麦朗汶や陳安や馬文康は、犯罪とされる行為をしてはいるが（そのため、彼らも犯罪を犯した犯人とは言うことができ、実際、洪泰集団との戦いで死ななかった麦朗汶と陳安は、最後に逮捕されている。）、この映画においては正義の英雄として描かれていると言える。実際、麦朗汶や陳安が護送されて裁判所に入ろうとする最後の場面では、麦朗汶は部下（かつての部下と言うべきかもしれないが。）に励まされる。部下は麦朗汶を励ますように、遠くから自分の胸を叩いてみせた。またすさまじい数の被害者の家族（救い出された女性たちもいたかもしれない。）が、麦朗汶と陳安に向けて、感謝の言葉を書いたボードを掲げて見せた。つまり、洪泰集団やそれと結託する警察局長や検察長は悪役の犯罪者であるのに対し、麦朗汶や陳安や馬文康は、正義の英雄として描かれていると言える。

18 ×

- 19 △（洪泰集団やそれと結託する警察局長や検察長らは、完全な悪役として描かれており、×。ただし、麦朗汶・陳安・馬文康は、犯罪を犯す者にも良い面があったという描かれ方ではなく、正義の英雄として描かれており、○。）
- 20 △（悪の犯罪集団・洪泰集団やそれと結託する警察局長・検察長らは、×。麦朗汶・陳安・馬文康ら犯罪集団に復讐する英雄的人物は○。）
- 21 △（20と同じ。）
- 22 △（陳安・麦朗汶・馬文康らの立場から描く。本当の悪役である洪泰集団やそれと結託する警察局長や検察長らの立場からは描いていない。）
- 23 ×

回廊亭 2023年

日本の東野圭吾の小説『回廊亭殺人事件』をもとに、改編した映画である。

富豪の高晋が病没し、親族たちが遺産の相続・分配のために、お互い疑心暗鬼の中、回廊の形をした回廊亭ホテルに集まる。そこに、主人公である弁護士・周揚が、高晋の遺言と、弁護士事務所に送られてきて遺産分配にも影響するというある日記とを持ってやって来る。日記は、1年前の火災で大火傷を負い自殺したとされる葉彤のもので、事件の真相を明らかにするものということだった。葉彤とは、高晋の秘書として、1年前その命を受けて高晋の私生児・杜宇を探し出し、高家に連れてきた女性である。火災では、高晋の私生児・杜宇が焼死し、杜宇を助けようとした葉彤は大火傷を負い、のち自殺したとされていた。

話が進んで初めてわかるのであるが、実は、周揚と自称する主人公の女性は、火傷の治療を受けて別人のようになった葉彤自身だった。火災で焼死した高晋の私生児・杜宇を愛しており、火災の真犯人を探り知り復讐するために、弁護士・周揚として回廊亭ホテルに来たのだった。ところが、高健のフィアンセとして高家に住んでおり周陽（つまり葉彤）から日記を盗み手に入れていた程萱が、誰かに殺害される。

実は、執事の女性・林珍恵が、高晋の（本当の）隠し子である杜宇（つまり周揚の恋人だった偽の杜宇ではない、真の杜宇）、及び、高健のフィアンセとして高家に住んでおり「周陽」（つまり葉彤）から火災事件の真相を記したと思われる日記を盗み手に入れた程萱との計2人を殺害していた。

林珍恵は、高晋への恨み・復讐心と、息子に高晋の遺産を継がせたいという願望のため、息子に高晋の息子の振りをさせ、高家に送り込み、高家の財産を得させようとしたのである。彼女の高晋を恨む気持ちは理解できなくもないが、少なくとも善人として描かれているとは言えない。

林珍恵の息子も、林珍恵とともに、高晋の隠し子殺害事件の犯人。高晋の隠し子として高家に入るため、葉彤をだまし、利用する。彼も林珍恵とともに犯人と言える。彼も、葉彤が火災の折に自分を助けようと火の中に飛び込むとまでは考えていなかったものであり、完全に悪い人物として描かれているわけでもないが、もちろん善人として描かれているわけではない。

映画の終盤になって初めてわかるが、周陽（つまり葉彤）が高晋の私生児・杜宇と思っていた

のは、実は高晋の私生児でも「杜宇」でもなく、林珍恵の息子が「杜宇」の名を称したのであり、しかも火災の折に焼死してもいなかった。焼死したのは別に現れた真の私生児・杜宇であり、それが邪魔となった林珍恵によって焼死させられたのだった。

「回廊亭」は、犯罪者が善人として描かれている映画とは言えないと思われる。

主人公の「周揚」つまり葉彤も、厳密にいうと、高家の人たちが程萱の遺体を隠蔽するのを手伝っており、犯罪を犯していると言える。高健を収蔵室に閉じ込め、ドラッグを大量に摂取した高健がそれがもとで死亡したことにも責任があるようにも思われる。しかし、ストーリー全体の中で、明らかに中心的な犯人・犯罪者は林珍恵（とその息子）なので、以下18～23では犯人・犯罪者を林珍恵（とその息子）として考える。

18 ×

19 ×

20 ×

21 ×

22 ×

23 ×

瞞天过海（瞞天過海） 2023年

スペイン映画「Contratiempo（邦題：インビブル・ゲスト 悪魔の証明）」（2017）を改編した作。東南アジアが舞台となっている。

喬文娜は、半年前に嫁いで沙氏グループに入った富豪の夫人であり、総裁として慈善事業に献身した人物であり、著名な華人建築設計師であり華人議員明賀城の養子である明浩が密室で殺害された事件の容疑者となっていた。明浩の殺害された密室に彼女だけがいたからである。

警官・鄭威は、明浩殺害事件担当の警官であるが、無実の容疑者と思われた喬文娜を、助けると言いつつ脅迫し、自分への協力次第では証拠を有利なものにして無罪にすることもできると言い、大金を得ようとする。正義や真実を追求しようとするのではなく、事件を利用して自らが大金を得ようとする貪欲で腐敗した悪徳警官であり、そのためには事件の真相追及を阻み、冤罪者を作ることさえ厭わない人物である。

映画がかなり進むまで、映画は上記のような内容と思われた。

しかし、どんでん返しがあり、映画がかなり進んだ所で、実際には上記とは全く違う内容であることが明らかになる。実は、無実かと思われた喬文娜が明浩を殺していた。また、呂平という他の人物をも殺害していた。

喬文娜は、結婚のほぼ直前とも言える時期に明浩と浮気をしていたが、明浩を乗せて車を運転していた折、呂平の車にぶつけてしまい、呂平に顔を知られてしまった。次に偶然会った折、呂

平ともめて彼を断崖の下に突き落とし、更にまだ息のあった彼を生き埋めにした。明浩は喬文娜に自首を促すが、喬文娜は明浩を殺害して口を封じたのだった。

鄭威と名乗る男は、そもそも警官でも悪徳でもなく、本名は呂程と言い、父・呂平が殺され、犯人と思われる喬文娜の犯行を明らかにし彼女を逮捕させるため、本物の警官・鄭威の協力のもと、悪徳警官になりすまし、喬文娜を脅迫する振りをして、喬文娜が殺人を犯したという本人の口述証拠を得、彼女を逮捕させたのだった。

18 ×

19 ×

20 ×

21 ×

22 ×

23 ×

热搜（熱搜） 2023年

ネットメディア「妙想世界」の編集長・陳妙は、女子専門学校での「いじめ事件」を題材とした記事を書き、バズらせる。記事によりネットは炎上し、「いじめ」の加害者とされた女子学生・張小穂には非難が集中し、彼女は校舎の屋上から飛び降り、意識不明の重態となる。自分が書いた記事がもとでネットが大炎上したのだが、陳妙は事件の裏には実は意外な真相があることを知ることになる。

いじめの加害者とされた女子学生・張小穂は、実は被害者で、「妙想世界」に投資する恒世グループの会長・王世民によりレイプされていた。そして、その口封じのため罠にはめられ、同級生で友達である余甜の助けを求めるメールを見てホテルの部屋に助けに行くと、半裸の男が横になっており、そこで突然写真を撮られ、援助交際をしている証拠とされてしまった。実際には、メールを送ったのは余甜ではなく恒世の社長・岳鵬であり、岳鵬が余甜のスマホを借りて送ったのだった。この余甜こそが「いじめ」の被害者とされた学生だった。張小穂は階段の上で余甜ともみあいになり、意図せず余甜を突き落としてしまい、その動画を撮られ、いじめの加害者とされたのだった。

陳妙は事件の真相を明らかにしようとするが、恒世の社長・岳鵬が真実を隠蔽しようと陳妙らに圧力をかけ、潰しにかかる。陳妙は世論の力で彼らと対決しようとする。会社を辞めて王世民・岳鵬らと対決することを決断し、世論の力により資本と強権に立ち向かう。陳妙には、彼女に従って会社を辞めたスタッフたちがチームとしてバックアップし、世論戦により事件を解決に導く。

この話において、善悪の対決の構図は非常に明確である。悪人は悪人である。

なお、映画の最後には中国の犯罪映画らしく字幕があり、それは以下のような内容であり、政府の宣伝とも言える内容となっている。

「2020年3月1日、国家インターネット情報事務室により公布された『インターネット情報内

容生態統治規定』が正式に実施された。『インターネット情報内容生態統治規定』は、ネット情報内容サービスの使用者・生産者・プラットフォームがネット暴力、ネットによる個人情報調査、ディープフェイク、流量偽造、アカウント操作などの違法活動をできないようにしている。(2020年3月1日、由国家互联网信息办公室颁布的《网络信息内容生态治理规定》正式实施。网络信息内容的服务使用者和生产者，平台不得开展网络暴力，人肉搜索，深度伪造，流量造假，操纵账号等违法活动。)」

18 ×

19 ×

20 ×

21 ×

22 ×

23 ×

最后的真相（最後の真相） 2023年

主人公の敏腕弁護士・丁義峰は、かつて2003年に被害者の利益のために同僚たちの不正を通報し、業界全体から村八分に会った人物であるが、弁護士として数々の違法な活動をおこない、訴えられ、すっかりおちぶれている。結局、示談を成立させるための保釈金を師匠が払ってくれ、その尽力で弁護士資格を保つことができただけでなく、ある法律事務所に紹介して再就職させてもらうこととなった。再就職した法律事務所で金喜妹の弁護を担当することになり、彼はこの裁判で勝って弁護士としての富と名声とを取り戻そうとした。

金喜妹は訪問マッサージ師の女性で、老人・馬双喜殺害の容疑者だった。殺人の鉄壁の証拠があると思われた。丁義峰が金喜妹に面会すると、なんと彼女は弁護を拒絶しようとした。話を訊くと、彼女は馬双喜は自分の客であり、馬双喜がずっとマッサージ代を払っておらず、その恨みのために殺害したと言う。丁義峰は、強姦されたのではないかと訊くが、金喜妹はそれには答えない。本当の真実は何なのか。丁義峰は、無罪、つまり裁判での勝利という目標を達成するため、捜査を開始した。丁義峰は、結局、もし金喜妹が当時、馬双喜に強姦された事実があり、正当防衛のために行動したのであれば、金喜妹が法で裁かれることはないと判断した。しかし、馬双喜は暴力的な人物であることを示す録画がある一方、馬双喜と金喜妹が特別に親しい関係であることを伺わせる録画もあり、また金喜妹自身、法廷において、強姦はされていないと述べた。事件の真相ははっきりとは分からなかった。

ある時、丁義峰は突然後ろから男に刃物を突き付けられ、金喜妹は冤罪だ、もし金喜妹が死刑になったらお前を殺す、と脅された。調べると、金喜妹には60万元もの高額な火傷治療が必要な息子・毛衛衛がおり、事件に関係があるかもしれないということが分かってくる。

法廷では、検察側が、金喜妹は、毛衛衛を治療させるために、馬双喜を誘惑し利用し、彼から治療費を得るつもりだったが、娘に立ち退き料を奪われてしまった馬双喜がお金を渡さず、金喜

妹はその恨みで彼を殺害したと述べた。丁義峰弁護士は、馬双喜が立ち退き料として大金を手に入れた時期より1月後に、馬双喜は肝硬変末期で死期が近いことが判明したが、娘に立ち退き料を奪われてもはやお金をくれる見込みがない馬双喜を金喜妹は献身的に介護しており、60万円のせいで恨んで殺害したという見方は成り立ち得ないということを指摘し、馬双喜に強姦されたため殺害したと金喜妹に話させる。

実は、丁義峰弁護士は、金喜妹の無罪を勝ち取るために、あらかじめ写真を使って金喜妹が死刑になった場合に残される息子・毛衛衛のことを思い起こさせ、その命運は丁義峰の手にあると、息子思いの母親を脅しており、彼女に法廷で偽証をさせて、馬双喜が彼女を強姦したと言わせたのである。結局、無罪を勝ち取ることができ、丁義峰は名声を得た。被告を無罪にするという丁義峰の目的は達成されたが、しかしそれは事件の真相ではなかった。

この事件は、金喜妹が刑務所内で壁に体をぶつけて自殺しようとし、昏睡状態に陥ったことで新たな展開を見せた。自分の故意によりこのような事態になったことに気づいた時、丁義峰は弁護士としての正義と良心に再び目覚める。金喜妹は回復するが、丁義峰は辞表を提出し、再び法廷に現れた彼は、もはや弁護士ではなく、一般の証人だった。

丁義峰は法廷で、容疑者・金喜妹が強姦されたから馬双喜を殺したと嘘を言うように自分が誘導したことを認めた。そして事件の真相がどのようなものであったかを語る。(その内容は金喜妹が語った供述に基づくものであり、それが本当の真相か、息子を庇い守るために金喜妹が自ら代わりに罪をかぶろうとしての供述か、確認はできない。)馬双喜は毛衛衛の治療費を捻出するため、事故死に見せて自殺(金喜妹と心中)し、保険金を詐取しようと思いつく。ところが計画を知らない毛衛衛の予期せぬ出現が、計画を狂わせた。保険金計画のことを知らない毛衛衛が、偽酒を飲み計画を実行しようとしていた馬双喜と金喜妹のもとに怒ってやって来、すでに死ぬことを決めていた馬双喜と揉みあいになり、(金喜妹の言葉の通りであれば、)毛衛衛は彼に瀕死の重傷を負わせ、金喜妹は馬双喜にも言われ、仕方なく灰皿で思い切り馬双喜の頭部を殴り、最終的に馬双喜を殺害し、保険を騙し取るという彼の意思を完遂した。(ただし、毛衛衛は自分が馬双喜を殴殺したと考えていた。金喜妹は馬双喜を殺害しておらず息子を庇い守るために代わりに罪をかぶろうとしたのかもしれない。)

丁義峰は、偽証させた罪に問われることを承知の上で、自らの良心から、強姦のために殺害したと証言することを金喜妹に強要したことを法廷で証言する。また、それが、生きようとしないう金喜妹を生かすためだったということを明らかにする。自分が裁判で勝つために金喜妹に偽証させたのではなかったのである。

毛衛衛は退廷の際、丁義峰に深々と頭を下げて感謝の意を表した。

その後、以下の字幕が現れる。

「金喜妹は故意殺人罪を犯し、法により無期懲役の判決となった。毛衛衛は故意傷害罪を犯し、法により懲役三年の判決となった。『中華人民共和国刑法』『中華人民共和国保険法』は、以下のように定めている。: 保険者・被保険者が故意に保険事故を捏造すれば、保険契約は無効であり、かつ、保険を詐取した者は、相応の法的責任を負う。(金喜妹犯故意杀人罪被依法判处无期徒刑,

毛卫卫犯故意伤害罪被依法判处有期徒刑三年。《中华人民共和国刑法》,《中华人民共和国保险法》规定:投保人,被保险人故意制造保险事故的,保险合同无效,且骗保者需承担相应的法律责任。)」

最後、拘置所で師匠と面会するシーンにおいて、丁義峰は、「かつて自分は弁護士は真実を追求すべきと考えていたが、真相を明らかにできない時、私たちは何を追求すべきだろうか。私は自分の良知を追求することを選ぶ。」と語る。馬双喜殺人事件も、金喜妹が本当に殺害したのか、彼女が息子を庇い守るために代わりに罪をかぶろうとしたのか明確とは言えず、丁義峰はその上で自分の良知に基づいて証言をしたのであろう。

金喜妹は、彼女の言葉を信じるならば実際に馬双喜を殺していたが、悪人としては描かれていないのみならず、善人として描かれているとすら言えるように思われる。暴力的な部分もある老人の馬双喜を心の底から愛しており、重病の彼から約束されていた息子の治療費60万元をもらえないと分かっても、献身的に彼を一人で介護する。自分が裁判で無罪となるには、すでに死んでいた馬双喜が自分を強姦したと言えいいのだが、丁義峰弁護士が脅迫と言えるような誘導をしなければ、決してそのような証言はしなかった。息子のことを心の底から愛し、彼を庇おうとしている。金喜妹の言葉を信じるとすると、馬双喜を殺害したのは金喜妹ではあるが、それは馬双喜がもともと肝硬変末期で死期が近く、馬双喜自身が自殺しようとしていたまさにその際のことであり、かつ馬双喜が毛衛衛によって瀕死の重傷を負わされた際に、保険金を得るという馬双喜の意思を完遂させるために、やむを得ず殺害したのである。

(毛衛衛は自己中心的であり暴力的でもあり、善人として描かれているとは言いがたいが、最後に法廷で罪を認め、丁義峰に深々と頭を下げて感謝の意を表している。彼も悪人として描かれているとも言えないように思われる。)

この映画は、犯罪者が善人であるという点でも、中国映画としては注目すべき作品である。(ちなみに、この映画における犯罪者・犯人は 上記金喜妹と毛衛衛の二人であり、丁義峰はこの作品におけるメインの犯罪者ではないが、丁義峰も被告に偽証をさせており、法を犯している。しかしこれも、生きようとしないう被告を生かすために偽証させたのであり、良心に基づく行為であった。)

金喜妹の最後に話した真相や、丁義峰が法廷で最後に述べた内容の通り、つまり上述の判決内容についての字幕の通り、金喜妹が本当に馬双喜を殺害したとして、以下を記載する。厳密に言えば偽証させた丁義峰も犯人ではあるが、この作品におけるメインの犯人は馬双喜の死に関わった者であり、馬双喜の死に関わった者のみをここでの「犯人」「犯罪者」とする。(なお、もし金喜妹が殺人をしておらず、殺人をしたのは毛衛衛であるならば、□ のようになろう。)

18 × [×]

19 ○ (金喜妹については○であろう。毛衛衛については、悪人とは言えないものの、善良な面が十分描かれているとは言えず、×であろう。金喜妹をメインと考える。) [×]

20 △ (殺人や傷害など犯罪を犯したことそのものについての苦しみは、ほとんど描かれていな

い。)〔× 毛衛衛のみにについて言うならば、×の方が近いかもしれない。〕

21 ○(金喜妹については○であろう。ただし、毛衛衛については×。金喜妹をメインと考える。)

〔×〕

22 ×〔×〕

23 ×〔○〕

鸚鵡殺(鸚鵡殺) 2023年

周冉は、ネット恋愛で、シンガポールに来て船員をしているという阿昌と自称する詐欺師と恋に落ち、55万円を騙し取られる。詐欺師が残した痕跡を辿って海岸沿いの小さな町を訪れた彼女は、偶然にも林致光と許照という二人の青年に出会う。阿昌と自称した林致光に騙されたと知った彼女は、彼に復讐しようとする。お互いすべてを知った上で再び気持ちが近づいたように林致光に思わせ、警察に通報、油断した彼を逃亡に失敗させ警察に逮捕させる。

詐欺師・林致光は、多くの女性からお金をだまし取り、周冉に惹かれ油断して逮捕されることになるが、だまし取ったお金を彼女に返そうとは全くしておらず、100%完全な悪人として描かれてはいないとは言え、やはりとうてい善人とは言いがたく、悪人として描かれていると言える。

詐欺師・許照は、林致光とともに一味を組み、周冉の金をだまし取って逃亡しようと画策する。しかし、計画を実行する過程で、周冉への思いに揺れ動き、計画が正しいのか疑い始める。しかし、彼も龐寧や陳婷ら多くの女性からお金をだまし取った詐欺師であり、100%の悪人としては描かれていないとは言え、やはりとうてい善人とは言いがたい。

ネット詐欺事件を扱っている点で、同年の映画「孤注一擲」や前年の映画「猎屠」などと共通している。

映画の初めの方(開始から5分目)において、「2016年前後、『殺人盤(詐欺集団による電信恋愛詐欺)』が一種の新しい電信詐欺として現れた:詐欺組織のメンバーはネット上で虚偽の身分、写真等の資料を通して、被害者と恋愛関係を結び、財産を詐取する。被害者の多くは都市の女性である。〔2016年前后,“杀人盘”作为一种新型电信诈骗出现:诈骗组织成员在网上通过虚假身份,照片等资料,与受害者建立恋爱关系,诈取财前。受害者多为城市女性。〕」という字幕が現れる。映画の最後には、「周冉と龐寧の協力のもと、検察はネット犯罪活動の疑いで、林致富(林致光と名乗っていた)・許照を公訴した。同時に、警察は黄又明(明哥と名乗っていた)の違法密航事件及び集会賭博事件を検挙した。〔周冉和庞宁的协助下,检察机关以涉嫌进行网络犯罪活动对林致富(曾用名林致光),许照提起公诉。同时,警方破获了黄又明(曾用名明哥)的违法偷渡案及聚会赌博案。〕」との字幕が出る。詐欺防止の映画という体裁をとっているようにも見える。こうした体裁をとることにより、審査を通して公開できているのかとも思われる。こうした点、非常に中国的である。

18 ×

19 ×

20 ×
21 ×
22 ×
23 ×

断・橋（断・橋） 2022年

大雨の際、ある橋が崩れ落ちた。その際、橋の中からある男性の死体が白骨化して発見される。その身につけていたノートから、彼は橋建設を告発しようとしていた技師・聞亮であったということが明らかになる。この作品の主人公の女子学生（大学院生）・聞曉雨は彼の娘である。逃亡中の殺人犯である青年・孟超（本名・張清冬）の助けを借り、真相を明らかにしようとする。

聞亮は橋建設の責任者・菊懷義を告発しようとする。その際、朱方正が聞亮に告発を思いとどまらせようとする。朱方正は、今では聞曉雨の母と結婚し、聞曉雨の養父となっていた。

朱方正は、聞亮は愛人とともに駆け落ちしたと話していた。しかし、それは嘘だった。愛人とされた甘小様は、実は聞亮の愛人ではなかった。彼女は、朱方正による聞亮殺害の真相を知っており、金を得るため、朱方正を強請っていた。

聞曉雨は孟超の力をも借りつつ、真相を明らかにしようとする。朱方正が父を殺害したのではないかという強い疑いを抱くようになる。

実は、聞亮が橋の手抜き工事で不正に儲ける菊懷義を告発しようとした際、朱方正らが聞亮に思いとどまらせようとして揉め、その際、朱方正は故意にはないが、聞亮を転落させ、更に、そこに上からセメントを流してしまったのだった。その際、友人である聞亮を殺してしまったことを悲しんだ。usbメモリーにその証拠が残されており、曉雨は真相を知る。

朱方正は真相を知った曉雨を毒殺しようとするがそれはできなかった。曉雨に刺され（命に関わるような大きな怪我にはならない。）、逆に彼女を捉え、ロープやテープで体や口の自由を奪って、家から冷却塔に運び人質にし、やはり真相を知り証拠のusbメモリーを持つ孟超を呼び、曉雨と引き換えにusbメモリーを得ようとする。その際、曉雨の首に刃物を当て、曉雨や孟超に対する言葉には、曉雨に対する優しさは全くない。「おまえは父親（聞亮）にちゃんと教育されなかった（しつけられなかった）。私の心に曉雨はない」などとも言う。優しさもない犯罪者らしい卑しい言葉を吐いている。朱方正は育ての子である曉雨への優しさが全くないというわけではないものの、基本的には卑しく卑怯な人間として描かれている。（少なくとも、自らの利害に関わる場合はそうである。）

朱方正は基本的に卑しい悪人として描かれている。この映画におけるメインの犯人は明らかに彼である。

政府機関の役人である唐は、口封じのため、朱方正に甘小様を殺させようとしている。法を破ったことにより、規律審査及び監察調査を受け、故意殺人罪の嫌疑で調査される。

孟超は殺人犯として逃亡していたが、善人である。曉雨を助け、自分は彼女には釣り合わないと思いつつ、彼女の幸せを願う青年である。甘小様の娘・藍苺に対しても優しい。曉雨・藍苺と

三人で過ごす場面には、彼の優しさが溢れている。彼はusbメモリーを持って自首しようとしている。ただし、彼の場合、その殺人自体が描かれているわけではなく、この作品における主要な犯罪者というわけではない。いや、映画最後の字幕に書かれているように、そもそも彼の行為は正当防衛であり、公安機関もそれを認め、刑事責任はないとして、事件として扱わないことを決定している。彼は犯罪者ではない。孟超がもともと凶悪な殺人を犯した人物であったとしても作品は成り立つように思うが、この作品は孟超を犯罪者ではないとし、犯罪者である善人を登場させようとはしていないと見ることができる。

18 ×

19 ×（孟超は犯人ではない。）

20 ×

21 ×

22 ×

23 ×

猎屠（獵屠） 2022年

中国の警察と新盛集団という東南アジアのM国に拠点を置き中国人たちを働かせる中国系電信詐欺集団との戦いを描く。新盛集団は企業の形をとるが、詐欺集団であり、犯罪行為を隠すためには監禁・暴力・殺人を犯すことをも辞さない。

中国の警官数名が捜査のためM国に赴く。新盛集団に潜入する警官もいる。彼らは現地警察の協力をも得つつ、捜査を行う。（ただし、現地警察の南康は犯罪者と繋がっている。）

中国警察と詐欺集団、正義と悪、の対決の構図は、最初から最後まで一貫して明確であり、組織は悪の組織として描かれ、周輝祖・楊力・祈念祖・宝哥・劉美美を始め、組織のメンバーは基本的に悪い人物として描かれている。（なお、組織幹部の方根正は、警察にやむなく協力させられており、警察のためにも働いているが、自分の利益を考える人物であり、善人として描かれているわけではない。梁逸宸も組織のパスワードを変更し逃亡しようとした人物であるが、善人として描かれているとまでは言えない。）

電信詐欺事件を扱っている点で、「孤注一擲（孤注一擲）」や「鸚鵡殺（鸚鵡殺）」などと共通している。

映画の最後は、市の反詐欺センターの通話やスマホメッセージでの市民への詐欺に対する注意喚起のシーンであり、視聴者への注意喚起ともなっている。（なお、そうした注意喚起が地方政府によりしっかりと行われているということを伝える、いわば政府の宣伝としての要素もないとは言えないであろう。）その後、以下の字幕が現れる。

「数か月の苦難に満ちた捜査を経、府河市公安局の殺猪盤〔詐欺の一種。被害者と長期にわたり電話やネットで親密な関係を築き、最終的に財産を騙し取るという手口の詐欺。〕特別捜査本

部は、成功裏に特大級の殺猪盤詐欺事件を検挙し、犯罪容疑者300人余りを捕らえ、事件に関わる金額は10億元余りだった。周輝祖は、故意殺人罪・詐欺罪・違法拘禁罪を犯し、複数の罪を合わせて罰し、死刑の判決となった。政治的権利を終身にわたって剥奪され、更に個人の全財産を没収された。劉美美は、詐欺罪を犯し、懲役4年、かつ人民元五万元の罰金に処せられた。方根正は、詐欺罪を犯し、事件解決に大きな貢献があったため、懲役3年・執行猶予4年の判決が下された。梁逸宸は、詐欺罪を犯したが、自らの意思で犯罪を中止し、かつ事件解決に大きな貢献があったため、刑事処罰を免れた。(经数月的艰辛侦办, 府河市公安局“猪屠”专案组 成功侦破特大跨国“杀猪盘”诈骗案, 抓获犯罪嫌疑人380余名, 涉案金额10亿余元。周耀祖, 犯故意杀人罪, 诈骗罪, 非法拘禁罪, 数罪并罚, 判处死刑。剥夺政治权利终身, 并处没收个人全部财产。刘美美, 犯诈骗罪, 判处有期徒刑四年, 并处罚金人民币五万元。方根正, 犯诈骗罪, 因有重大立功表现, 判处有期徒刑三年, 缓刑四年。梁逸宸, 犯诈骗罪, 因主动中止犯罪, 且有重大立功表现, 免予刑事处罚。)」

18 ×

19 ×

20 ×

21 ×

22 ×

23 ×

2. 本論 (「犯罪・ミステリー映画の日中比較 (5)」の本論の続き)

2.4.11 犯罪者が善人でありうるか

この点を日中で比較するため、まず下記の表4・表5を見てみたい。

表4は、「犯罪・ミステリー映画の日中比較 (4)」において作成した表3から項目19・21のみについて抜粋・転載したものである。表4の表中の数字は、パーセンテージ。

「◎?」は◎, 「○?」は○, 「△?」は△, 「×?」は×, として計算。

「○ (△)」の類は、○として計算。(例えば, 「△ (×)」は, △として計算。)

／だけしか書かれていないもの (該当なしの場合) と, ?だけしか書かれていないもの (不明の場合) は, ないものとして数えず。パーセンテージを計算する時, 分母・分子に入れない。

〈○〉だけしか書かれていないものは, ○として計算。

表5は「1.3 2022～2023年の犯罪ないしミステリー系の中国映画の紹介」における各映画についての説明をもとに項目19・21について作成したものである。集計の仕方は基本的に表4と同様。ただし, 「1.3 2022～2023年の犯罪ないしミステリー系の中国映画の紹介」の各映画の説

明における項目19・21についての記載において、○をつけて別の評価をも書いたものについては、○内の評価をも採用し、表5の右側に別に欄を設け、○内の評価を採用した場合のパーセンテージを記した。

表4 日中映画比較表（2010年～2018年の作品）

	中国				日本			
	◎	○	△	×	◎	○	△	×
19 犯人の善良な面をも十分描いている。	5	8	0	86	5	16	14	65
21 犯罪者の内面に目を向け、犯罪に至らざるを得なかった過程を十分に描いている。	0	3	6	92	2	12	12	74

上記映画の具体的内容については、「犯罪・ミステリー映画の日中比較」(1)～(3)の各映画についての説明及び本論文「犯罪・ミステリー映画の日中比較(6)」の表1・表2をご覧ください。

表5 中国映画（2022年～2023年の作品）

	中国				中国：各映画の説明における項目19・21に関して、○をつけて別の評価をも書いたものについて、○内の評価を採用した場合			
	◎	○	△	×	◎	○	△	×
19 犯人の善良な面をも十分描いている。	0	7	13	80	0	0	13	87
21 犯罪者の内面に目を向け、犯罪に至らざるを得なかった過程を十分に描いている。	0	7	13	80	0	0	20	80

表4と表5を見ると、項目19・21について日中の傾向の差が見て取れる。

日本の2010年～2018年の映画と、中国の2010年～2018年及び2022年～2023年の映画を比較してみると、あくまでも程度・傾向の差に過ぎないが、日本映画は中国映画と比べ、犯人の善良な面を十分描いている作品が多く、また、それとも関連があろうが、犯罪者の内面に目を向け犯罪に至らざるを得なかった過程を十分に描いている作品が多いと言える。

なお、映画ではなく小説の分野の話であるが、東野圭吾は中国で非常に人気のある作家である。2016年～2019年の外国人作家印税収入ランキング（文学だけでなく、それ以外のあらゆるジャンルをも含む。）で、東野圭吾が外国人作家のトップである²⁾。（2020年以降については公表されておらず、不明である。）そこで、数多くの作品が人気がある東野圭吾の作品のうち、とりあえず中国で最も人気のある『ナミヤ雑貨店の奇蹟』『白夜行』『容疑者Xの献身』3作品の内容をここで見てみる。これらの作品は、中国の多くの作品と比べると、犯人を単に犯人として切って捨

てず、それが作品に深みを出しているように思われる。

以下がそのあらましの内容である。

『ナミヤ雑貨店の奇蹟』

3人の青年は彼らのいる大切な児童施設「丸光園」を買収しようとしている女性社長・武藤春美の別宅で空き巣・強盗を働き、逃走、近くの廃墟となっている建物に逃げ込む。その建物はかつて地元で愛されていた「ナミヤ雑貨店」だった。ナミヤ雑貨店は、昔、地域住民からの悩みを解決するアドバイスを手紙で送ることで知られていた。青年たちは不思議な現象に気づく。ナミヤ雑貨店の郵便受けから手紙を投げ込むと、その手紙に対する返信が店の裏手の牛乳箱に返ってくる。しかも、その返信は過去の日付で書かれている。彼らは、この家が時空を超える通信を可能にする特別な場所であることを知る。

青年たちは、行きがかり上、店主の代わりに過去の人々の悩みに答えるようになる。彼らは手紙を通じて、未来に向けた希望や助言を提供し、それによって自らも救済される感覚を得る。この過程で、青年たちは人々の心の痛みに寄り添い、過去の人々との間に深いつながりを感じるようになる。

ナミヤ雑貨店で過去の人々との手紙のやり取りを続ける中で、青年たちは衝撃的な事実を知る。手紙の一通には、32年前の武藤春美が書いたと思われる内容があった。

この発見により、青年たちは、武藤春美が彼らが思い込んでいたような悪質な地上げ屋ではなく、かつてナミヤ雑貨店の郵便受けから悩み相談の手紙を投函し、青年たちが（過去に向けて）書いた返事に基づいて頑張り、困難な状況から抜け出した人物であることを理解する。彼女は成功し、世の中への恩返しとして丸光園を救おうとしていたことが明らかとなる。

彼らは、夜明け前に武藤春美の家へと向かい、彼女が眠っている間に、盗んだ品物を元の場所に戻す。その後、武藤春美が別宅を訪れた際、青年たちは自らの過ちを認め、彼女に対して心からの謝罪を行う。

青年たちは、これまでの過ちを乗り越え、自分たちの未来を自らの手で切り開こうという前向きな意志を固める。

『白夜行』

雪穂は、悪人中の悪人、いわばサイコパス的な恐るべき悪女。嘘を重ね、人を利用し、殺人を含めた犯罪その他の悪事を繰り返す。邪魔となった人間の殺害を繰り返すが、それ以外でも例えば、完全に財産目当てで、策略を弄しだまして金持ちと結婚したり、また策略を弄してその相手が離婚せざるを得なくしたりもする。口封じしたい女性、あるいは邪魔な女性を亮司にレイプないしレイプ未遂させたことも計3回ある。

亮司も、人をだますことや殺人その他の悪事をすることを繰り返す悪人。

彼らは自分にとって邪魔な人物や口封じしたい人物を次々に不幸にしたり、消したりしていく。たとえそれが親友や善意の人物であっても。

とりわけ雪穂は本当に冷酷で恐ろしい人物。性格が完全に歪んでいる。

しかし彼らのそこに至った子供の頃からの不幸な境遇や二人の関係・絆、白夜のような薄暗い中で生きてきた人生を考えると、哀しく切ない。

『容疑者Xの献身』

しがたないが天才的な高校の数学教師である石上の花岡母子に対する献身的な無償の愛が描かれている。

石神は、毎朝すれ違うだけの隣の花岡母子に惹かれ、彼女たちの身边を気にかけている。そして、花岡靖子とその元夫に付きまといられていることを知る。

元夫は花岡靖子にたびたび金を無心し、彼女が応じない場合は娘の美里に危害を加えると脅迫していた。ある日、元夫は花岡のアパートに押しかけ、暴力的に金を要求し、恐怖におびえる花岡母子は衝動的に彼を殺害してしまう。

物音に気づいた石神はすぐに花岡の部屋を訪れ、事態を把握し、天才的な頭脳で、事件を隠蔽しようとする。事件の隠蔽のために、自ら手を汚して浮浪者を殺害するという犯罪まで犯す。その死体を花岡の元夫の死体に見せて、真実を隠蔽するためである。

また、真実がばれてしまいかねなくなった時、石神は花岡靖子に対する悪質なストーカーであったと警察や花岡に思わせ、花岡の元夫を殺害したのは自分だと警察に話し、花岡を守ろうとする。自分を悪役とし、花岡靖子に恐れられ嫌われてまでして、花岡母子の罪をもみ消して花岡を守ろうとする。

ガリレオ、つまり湯浅教授は真実を見抜いており、真実を花岡靖子に話す。

花岡靖子は自供する。

取調室から出た石神の前に、既に自供を終えた花岡が現れる。花岡は涙ながらに石神の前にひれ伏し、懺悔の気持ちで謝罪し続ける。

石神は浮浪者を殺害したが、それは、花岡を庇い守るため石神が行った無償の献身的な行為だった。恐ろしいストーカーと思わせ、花岡に嫌われ恐れられてまでしたのも、花岡を守ろうとした自己犠牲的な愛の行為だった。石神は殺人犯であるが、善人である。

そして花岡靖子もその娘も、全く悪人としては描かれていない。

日本の犯罪ものの作品は、映像作品だけでなく、小説においても、犯罪者を悪人として簡単に切って捨てない傾向が強く、犯罪者を善人として描く作品すら少なくないと思われる。もちろん、これは中国との絶対的な相違ではなく、あくまでも傾向・程度の違いに過ぎないが、傾向・程度の違いは存在すると見てよいように思われる。日本の犯罪ものの映画が中国のそれよりもレベルが高いと簡単に言えるわけではないと思うが、この点に関して言うと、日本の犯罪ものの作品の善悪を割り切らないこうした特徴は、往々にして作品に深みを与えているように個人的には感じている。

これには日中の文化的な違い、人々の考え方の違いも関わっているかもしれないが、やはり中

国における映画審査制度（いわゆる検閲）が関わっているのではないと思われる。

広電総局公布の映画管理についての法令（「電影劇本〈梗概〉備案，電影片管理規定」（《电影剧本〈梗概〉备案，电影片管理规定》³⁾）には，以下の条項がある。（下線部は筆者によるもの。）

「十四，映画には下記のストーリーがあれば，削除し修正しなければならない。：……（四）凶悪な殺人，暴力，恐怖の内容が混ざり，真偽・善悪・美醜の価値基準をあべこべにし，正義と非正義の基本的性質を混同させるもの；……（十四 电影片有下列情形，应删剪修改：……（四）夹杂凶杀，暴力，恐怖内容，颠倒真假，善恶，美丑的价值取向，混淆正义与非正义的基本性质；……）」

2.4.12 最近の中国犯罪映画においては，映画最後の字幕などにより，犯罪者にどのような刑罰が下されることになったかを明確に伝えたり，政府の宣伝となるような内容を伝えたりすることが少なからず見られ，また，犯罪を減らすための啓蒙的な内容を伝えたりするものも見られるが，日本映画にはそのようなものは見られない。ただし，中国犯罪映画のこうした特徴は，ここごく数年に目立つようになったものである。

下記の表6は，「1.3 2022～2023年の犯罪ないしミステリー系の中国映画の紹介」の各映画の説明に基づいて作成したものである。A「映画最後の字幕などにより，犯罪者にどのような刑罰が下されることになったかを明確に伝えている作品」，B「映画最後の字幕などにより，政府の宣伝となるような内容を伝えている作品」，C「映画最後の字幕などにより，犯罪を減らすための啓蒙的な内容を伝えている作品」，それぞれが2022～2023年の犯罪ないしミステリー系の中国映画計15作品中どれだけあるかをチェックしている。（該当するか明確には言いにくい作品もある。表のデータはあらましの目安であり，評価次第では，若干表と異なることもあり得るかもしれない。□内に映画最後の字幕のみに限定した場合の作品数を記載した。）表6の下には，A・B・Cに該当する具体的な作品名を書いておいた。

表6

A 映画最後の字幕などにより，犯罪者にどのような刑罰が下されることになったかを明確に伝えている。 B 映画最後の字幕などにより，政府の宣伝となるような内容を伝えている。 C 映画最後の字幕などにより，犯罪を減らすための啓蒙的な内容を伝えている。	中国(2022～2023) 15作品中8作品〔7作品〕 15作品中4作品〔4作品〕 15作品中4作品〔1作品〕
---	---

A 孤注一擲（孤注一擲）〔映画最後の字幕ではないが，その直前に，反詐欺宣伝担当の警官・

趙東冉が人々〔大学生だろうか。〕の前でその内容を話す場面がある。〕/消失的她/堅如磐石（堅如磐石）/三大隊（三大隊）/拯救嫌疑人/涉过愤怒的海（涉過憤怒的海）/最后的真相（最後的真相）/猎屠（獵屠）/〔〔注：なお、「鸚鵡殺（鸚鵡殺）」は、犯罪者にどのような刑罰が下されることになったかが明確にされているわけではなく、Aに該当しないが、犯罪がどのような犯罪により公訴・検挙されたかについては字幕に明確に書いている。〕〕

なお、上記映画のうち「拯救嫌疑人」(2023年)は、韓国映画「セブンデイズ 세븐데이즈」(2007)をリメイクした作だが、むしろ韓国の「セブンデイズ」にこうした類の字幕（やそれに相当するナレーション・場面等）はない。

B 孤注一擲（孤注一擲）/堅如磐石（堅如磐石）/热搜（熱搜）/猎屠（獵屠）

C 孤注一擲（孤注一擲）〔映画最後の字幕ではないが、その直前に、反詐欺宣伝担当の警官・趙東冉が人々〔大学生であろうか。〕の前でその内容を話す場面がある。〕/最后的真相（最後的真相）〔映画最後近くの字幕に、保険契約者または被保険者が故意に保険事故を起こした場合、保険契約は無効となり、また、保険詐欺を行った者は相応の法的責任を負う必要がある、との内容がある。〕/鸚鵡殺（鸚鵡殺）〔映画最初あたりの字幕に多少ある。〕/猎屠（獵屠）〔映画最後の字幕の直前に、字幕ではないが、府河市反電信詐欺センター＜府河市反電信詐騙中心＞が注意するようにと電話やネットを通して市民に呼びかける場面があり、啓蒙的・教育的内容を伝えている。〕

日本映画には基本的にこのような映画はないので、あえて日本映画の表を作成して日中を比較するまでもなく、中国の犯罪系映画にこうした作品が多いことが簡単に見て取れる。

A「映画最後の字幕などにより、犯罪者にどのような刑罰が下されることになったかを明確に伝えている。」に該当する作品はとりわけ多いが、これはC「映画最後の字幕などにより、犯罪を減らすための啓蒙的な内容を伝えている。」と同様、犯罪を減らし社会秩序を守るためであろう。広電総局公布の映画管理についての法令「電影劇本〈梗概〉備案, 電影片管理規定」⁴⁾第十四条には、以下の条項がある。

「十四 映画に下記に列举する内容があれば、削除して修正すべきである：……（四）殺人・暴力・恐怖の内容が混じり、真偽・善悪・美醜の価値基準をあべこべにし、正義と非正義の基本的性質を混同させるもの；違法な犯罪が勢力をふるっていることを工夫を凝らして表現し、具体的に犯罪行為の細部まで示し、特殊な捜査手段を暴露するもの；強烈で刺激的な殺人、血なまぐささ、暴力、麻薬、賭博などのストーリー；……（十四 电影片有下列情形，应删剪修改：……（四）夹杂凶杀、暴力、恐怖内容，颠倒真假、善恶、美丑的价值取向，混淆正义与非正义的基本性质；刻意表现违法犯罪嚣张气焰，具体展示犯罪行为细节，暴露特殊侦查手段；有强烈刺激性的凶杀、血腥、暴力、吸毒、赌博等情节；……）」

犯罪映画に犯罪の助長に繋がらず社会秩序を守るようにするための配慮が強く求められてお

り、そのため、「映画最後の字幕などにより、犯罪者にどのような刑罰が下されることになったかを明確に伝えている。」「映画最後の字幕などにより、犯罪を減らすための啓蒙的な内容を伝えている。」といった作品が多くなっているのであろう。もっとも、「孤注一擲（孤注一擲）」「獵屠（獵屠）」などは、そもそもともと詐欺防止の教育的映画としての性格を明確に有しているとも言えようが。

「映画最後の字幕などにより、政府の宣伝となるような内容を伝えている。」に該当する作品も15作品中3（4）作品ある。「国家新聞出版广电总局の主要職責・内設機構と人員編成についての規程」⁵⁾の「二、主要職責（主要职责）」において最初に挙げられている「（一）」は、以下の条項である。「ニュース・出版・放送・映画・テレビの宣伝の方針政策を立案する任務を負い、正しく世論を導き創作を導くことを堅持する。（负责拟订新闻出版广播影视宣传的方针、政策，把握正确的舆论导向和创作导向。）」宣伝（むろんこれは商業的意味での宣伝のことではなく、政治的意味での宣伝である。）は、審査を管轄する機関である国家新聞出版广电总局の最重要の職責でもある。

中国の映画には審査制度があるため、やはりそれを通すために犯罪系映画に表6の上記の3つの項目のような部分に加えられているのであろう。

ただし、実は表1の映画（2010年から2018年の中国映画）においては、実は37作品中、A・B・Cに当たる作品は、それらをすべて合わせても、少なくとも、映画最後の字幕によるもののみに限定すれば、Bに当たる「心理罪 城市之光」（2017年12月）と「“大”人物」（2018年）しか存在していない⁶⁾。（「解救吾先生」（2015年9月）と「幕后玩家」（2018年）も、ほとんど最後あたりに出てくるテレビニュースにおいて、犯罪者にどのような刑罰が下されることになったかを明確に伝えており、あるいはAに該当すると言ってもいいのかもしれない⁷⁾。）なお、表1の作品37作品以外でも、2010年から2018年の中国犯罪系映画・ドラマを十数作品確認したが（つまり2010年から2018年の中国犯罪系映画・ドラマを50作品以上チェックしたことになる。）、2013年の中国ドラマ「浮尘下的枪声」だけがAに該当していた。2010年から2018年の作品においては、A・Bに当たる作品は非常に少なく、しかもその多くはその終わり頃の作品である、Cに当たる作品は調査した作品中にはなかった、ということが言うことができる。

2014年4月15日、新たに設立された中央国家安全委員会の第一回会議において、習近平中国共産党総書記は「総体的国家安全保障観」という概念を打ち出し、その後、10年にわたって国家秘密保護法、反スパイ法、国家安全法、インターネット安全法、国家情報法など、次から次へと新たな法律が制定され、指導者たちが繰り返し「国家安全」に言及するようになった⁸⁾。

A「映画最後の字幕などにより、犯罪者にどのような刑罰が下されることになったかを明確に伝えている作品」、B「映画最後の字幕などにより、政府の宣伝となるような内容を伝えている作品」、C「映画最後の字幕などにより、犯罪を減らすための啓蒙的な内容を伝えている作品」、こうした作品が近年多く現れるようになったことには、当然、習近平政権が国家安全の重視の姿

勢を強めてきたことと密接に関わっているものと考えられる。中国政府が映画などの文化・産業に対してもより厳しく関与するようになったことの表れと言えよう。

なお、「犯罪・ミステリーの日中比較 (3)」2.4.3.2において2019年～2021年の中国映画・ドラマにも触れているが、そこに挙げた作品で言うと、例えば、「特警使命之全域危机」(2020年映画)、「燃烧」(2020年ドラマ)、「刑警本色」(2021年映画)、「刑警之海外行动」(2021年ドラマ)、「扫黑英雄」(2021年映画)において、すでに、映画最後の字幕などにより、政府の宣伝となるような内容を伝えるもの(つまりBに該当する。)となっている。また、「破冰行动(ドラッグ・ウォーズ)」(2019年ドラマ⁹⁾、「沉默的真相(ロング・ナイト)」(2020年ドラマ)、「谁是凶手」(2021年ドラマ)において、字幕などにより、犯罪者にどのような刑罰が下されることになったかを明確に伝えている。(つまりAに該当する。)

さきほど、表1の映画(2010年から2018年の中国映画)においては、37作品中、A・B・Cに当たる作品は、少なくとも、映画最後の字幕によるもののみに限定すれば、Bに当たる「心理罪 城市之光」(2017年12月)と「“大”人物」(2018年)のみである、「解救吾先生」(2015年9月)と「幕后玩家」(2018年)もあるいはAに当たるといいいかもしれない、)それら37作品以外でチェックしたこの時期の十数作品の映画ないしドラマでは、2013年の中国ドラマ「浮尘下的枪声」のみがAに該当していた、と書いた。

2010年代終盤あたりから、習近平政権の国家安全重視の姿勢が、A・Bに該当する映画を多く生み出すようになったと言えよう。

なお、Cのみについて言うと、上(表6及びその下に書いた作品名)に挙げた4作品中3作品(孤注一擲〔孤注一擲 2023年8月〕/鸚鵡杀〔鸚鵡殺 2023年9月〕/猎屠〔獵屠 2022年8月〕)は、電信詐欺犯罪に関わるものである。本論文「犯罪・ミステリー映画の日中比較」(1)～(6)において取り挙げた作品では、表6の下に書いた4作品以外にCに当たる作品はなかった。

中国では、近年、電信ネットワークを利用した事件が増加している¹⁰⁾。2020年には、詐欺事件の立件数が刑事事件の種類別で最多となり、特にインターネット・電話等の電信ネットワーク詐欺の多発が社会問題となっている。最高人民法院(最高裁判所に相当)等の機関では、刑法の詐欺罪適用に関する規定等の関係文書を整備したが、2021年4月、習近平国家主席は、電信ネットワーク詐欺に対し、法整備を含む全面的な対策強化を指示し、同年10月、電信ネットワーク詐欺防止法(中华人民共和国反电信网络诈骗法: 中華人民共和國反電信網絡詐騙法)の草案が全国人民代表大会常務委員会に提出され、2022年9月2日の同会議で可決・公布され、2022年12月1日に施行されている¹¹⁾。

Cに該当する作品が最近急増したのは、直接的には中国のこうした状況を踏まえたものということができよう。

注

- 1) 「22年前に殺された母の仇討ち殺人が共感を呼ぶ『中国の司法事情』」北村豊
「現代ビジネス」2019年4月23日 <https://gendai.media/articles/-/64252?page=4>
「世論は仇討ちに共感?」(筆者注: 下線部は筆者による。)

中国で仇討ちという思い出されるのが春秋時代末の紀元前485年に死去したとされる伍子胥(ごししょ)である。

彼は楚国の武人で、楚国のお家騒動で父と兄が平王に殺されると、楚国から逃げて呉国に身を寄せた。呉国では呉王・闔閭(こうりょ)の信任を得て国力の充実に努め、後に呉国を助けて楚国を攻め滅ぼした。

呉国の将軍として楚国の地へ凱旋した伍子胥は、すでに葬られていた平王の墓をあばき、その屍(しかばね)を鞭(むち)打って父と兄の仇を討った。この故事から『死んだ人の言行を非難する』という意味の『死屍(しし)に鞭打つ』という成語が生まれたことは有名である。

一方、中国語の別の言葉に『“君子报仇，十年不晚(君子の仇討ちは10年後でも遅くはない)”』というのがある。“君子”は人格者を意味するから、張扣扣(筆者注: 母親を22年前に王家父子三人に殺され、その仇討ちのため王家父子の三人を惨殺した人物。)に当てはまるとは言えないが、苦節22年で母親の仇討ちを行ったことは、決して遅くないということになるのかもしれない。

張扣扣は一貫して母親を殺したのは王家の次男である王富軍だと主張していたが、2019年1月8日の第1審で、従来の主張を変えて母親を殺したのは彼が殺害した三男の王正軍であることを認めたのだという。

母親が殺害された現場で全てを目撃していた張扣扣が主張を変えて、王正軍が真犯人だと認めたのは何故なのか。

張扣扣が王家父子3人を殺害した時に王富軍は不在で難を免れた。王家父子4人を殺害して仇討ちを完遂させたかった張扣扣にとっては、母親に直接手を下した王富軍を打ち漏らしたことは痛恨の極みだったろう。

しかし、仇討ちの幕がすでに下りている以上は、王富軍の身代わりとなった王正軍を殺したことで仇討ちの完結を確認したのかもしれない。

2019年1月8日に張扣扣を死刑に処すとの1審判決が下ると、民間では“刀下留人(死刑執行待った)”と銘打った署名運動が展開されて、死刑執行の猶予を求める声が上がった。

それと同時に、ネットユーザーがインスタントメッセージアプリ“微信(WeChat)”を通じて“刀下救人(死刑執行停止)”のアンケート調査を行った。1月9日午後5時までの集計では、『死刑は重すぎる』が9118票で、『死刑は当然』はわずか396票に過ぎなかった。

当該アンケート調査は当局によって1月10日早朝にネット接続を打ち切られたが、1996年12月の裁判が公正な判決を下していれば、張扣扣が仇討ちによってその人生に36年目で終止符を打つ必要はなかったと、中国国民の多くが考えていることは明白な事実である。」

(以下は筆者)

死刑執行数は、人口比で考えても中国が日本より圧倒的に多い。

CrimeInfo (<https://www.crimeinfo.jp/data/toukei/execution/>) によると、令和元年(2019)から令和5年(2023)までの5年間の日本における死刑執行数は計7件である。つまり、日本では、この5年間に於いて、年間平均で1～2件の死刑執行があったということになる。一方、アムネスティ・インターナショナル日本の報告書「2023年の死刑判決と死刑執行(日本語訳)」p1・p2(2024年 https://www.amnesty.or.jp/library/report/pdf/statistics_DP_2023.pdf)によると、2023年を含め中国の毎年の死刑執行件数は数千件である。

したがって、上記の張扣扣についての“刀下救人(死刑執行停止)”のアンケートの結果は、死刑が人口

比で見ても数百倍と桁外れに多い中国におけるアンケート結果であるにもかかわらず、親の仇討ち殺人（3人を殺害）について、死刑は重過ぎるという意見が圧倒的多数である96%を占めたことを表している。

やはり中国では、現在においても、親の仇討ち殺人については日本より寛容な社会であるといえるように思われる。

なお、中国は伝統的には間違いなく仇討ちをよしとする社会である。以下など参考になる。

『中国の復讐者たち』竹内康浩 大修館書店 2009年

「復讐譚の背後に潜む人間観をさぐる」尾形勇 東方書店 <https://www.toho-shoten.co.jp/review-toho345-4>
(上記『中国の復讐者たち』についてのレビュー)

- 2) 「犯罪・ミステリー映画の日中比較(3)」近藤泉「名古屋学院大学論集(言語・文化篇)」2022年3月 p48
- 3) https://www.gov.cn/zhongce/2021-12/14/content_5711916.htm
- 4) 《电影剧本(梗概) 备案, 电影片管理规定》
- 5) 「国家新闻出版广电总局主要职责内设机构和人员编制规定」国办发〔2013〕76号《国务院办公厅关于印发国家新闻出版广电总局主要职责内设机构和人员编制规定的通知》(http://www.gov.cn/zwggk/2013-07/17/content_2449645.htm)
- 6) 「心理罪 城市之光」においては、映画のストーリーが終わると、動画視聴サイトで視聴した場合、最後の場面に「仅以此片献给在城市中守望光明的战士」との一文が大きく現れ、この映画は都市において光明の見張りをする戦士に献じられるとされている。さらにその後、音楽が流れる中、画面に出演者・制作関係者の名前が表示される中、警官・消防署員・軍人などの人々が、様々な事件や災害などにおいて人々のために活躍する映像も、それについての文字説明と共に、次々に流される。光明を見張る戦士である警官・消防署員・軍人らを称えるものとなっている。「大」人物においては、ストーリー上必要がないにも関わらず、映画の最後で音声のない文字のみの画面（「自2018年1月到7月底全国公共机关打掉涉黑组织514个，恶势力犯罪集团2993个，破获刑事犯罪案件3.4万起，全国刑事治安警情同比下降6.1%。」）が表れ、警察など全国の公共機関がいかに犯罪集団・組織の取り締まりに成功し、刑事案件を解決し、治安状況が改善したかを、わざわざ示している。政府の統治がいかに優れたものであるかを示そうとするものであると言える。
- 7) なお、「解救吴先生」をリメイクした韓国映画「인질(「人質」の意。邦題:「人質 韓国トップスター誘拐事件」)」(2021)においては、「解救吴先生」同様、映画の終わり近くで事件についてのテレビニュースが流れるが、「解救吴先生」とは違い、犯人が（検挙されたことがわかるだけで、）どのような刑になったかまでは明らかにされていない。
- 8) 「中国の国益を損なう「国家安全」重視路線 経済と学術研究に深刻な悪影響」李昊 2024年11月12日 中国学.com <https://sinology-initiative.com/politics/2001/2/>
- 9) 「犯罪・ミステリーの日中比較(3)」p62において「2018年ドラマ」と書いたが、2018年に制作しているものの、正しくは2019年5月に初めて放送されたドラマであった。ここで訂正しておきたい。
- 10) 2015年にはすでに、国务院が公安機関を先頭とした長官クラスの連合会議制度を立ち上げることを批准し、専用回線により電信ネットワーク新型違法犯罪に打撃を与え管理・統治するようになっている。(2018年の中国の反詐欺映画「反诈风暴之陌生号码(反诈風暴之陌生號碼)」の終わり近くの字幕に、「2015年6月，国务院批准建立以公安机关牵头的部级联席会议制度，专线打击治理电信网络新型违法犯罪。3年来，共挽回人民群众经济损失六十三亿元。」とある。)

1.3で紹介した2023年の中国映画「鸚鵡殺(鸚鵡殺)」においては、その初めの方の字幕において、「2016年前後、『殺人盤(詐欺集団による電信ネットワーク恋愛詐欺)』が一種の新しい電信詐欺として現れた」ことが紹介されている。（「2016年前后，‘杀人盘’作为作为一种新型电信诈骗出现」）

なお、「刑侦队(刑侦隊)」(2016年)、「反诈风暴之不可饶恕(反诈風暴之不可饒恕)」(2017年)、「反诈风

犯罪・ミステリー映画の日中比較 (6)

暴之情愛迷局(反詐風暴之情愛迷局)』(2017年),「反诈风暴之罪恶来电(反詐風暴之罪惡來電)」(2018年),「反诈风暴之猫鼠之战(反詐風暴之貓鼠之戰)」(2018年),「反诈风暴之陌生号码(反詐風暴之陌生號碼)」(2018年),「张天之谎(張天之謊)」(2018年)(以上いずれも中国・大陸の映画)や,「巨额来电(巨額來電 邦題;ザ・ビッグ・コール 史上最強の詐欺師たち)」(2017年,中国・香港合作映画〔監督は香港〕)等の2010年代の反電信詐欺映画においては,明確にCに当たる要素はない。(ストーリー上,電信詐欺が行われる場面があるものの,視聴者に電信詐欺に注意させるような字幕や,反電信詐欺の立場の組織や人が多数の人々に対して電信詐欺に注意するよう呼び掛ける場面などはない。)

- 11) 「【中国】 電信ネットワーク詐欺防止法の制定」湯野基生 『外国の立法』 No.294-2 2023年2月 <https://dl.ndl.go.jp/view/prepareDownload?itemId=info:ndljp/pid/12542917>